73　向原の御嶽山石祠（泉沢町）

屋根は唐破風造で、正面に「御嶽山」と陰刻されている。室部の右側面に「明治廿三庚寅年（一八九〇）十二月八日」の刻銘がある。現在も御嶽講があり毎年四月八日に祭りが行われている。十数年以前は代表役員三人が毎年本山へ参詣していたが、現在は参詣することはなくお札を送ってもらっているという。

武州御嶽山は、東京都西多摩郡三田村にある標高九一〇㍍の霊峰のことで、山上に武蔵御嶽神社が鎮座している。この武州御嶽山は、大和国（奈良県）の金峰山蔵王権現を勧請していることから武蔵金峰山または金御嶽などとも称されている。祭神は日本武尊である。第十二代景行天皇の皇子で東国平定の命を受け東夷（東方の未開地）征伐のみぎり、御嶽山から東国へ赴こうとしたとき、そこに棲む邪神が白鹿に身を変えて路を塞ぎ妨害した。古来より白鹿は神の使いとして崇敬されていたため、武尊はこれを避けたため道に迷い難渋した。このとき白狼が現れ日本武尊を導き無事に山越えができたと伝えられる。

日本武尊は白狼に「以後はこの山上にあって、常に火災・盗難に立ち向かい、その守護神になるがよい」とお言葉を告げたという。このような故事にちなみ武州御嶽山は火災盗難除去の守護神として崇められた。徳川家康は江戸城鎮守神として崇拝したという。日本武尊を導いた白狼にちなみ御嶽山のお札には狼が描かれている。

＊城南公民館だより「城南」平成23年4月15日発行

御嶽山石祠

74　丸山の毘沙門天塔（泉沢町）

高さ一一〇チセン、幅七十七チセンの上部がとがった安山岩に、左手には戟（矛と戈を組み合わせた武器）を持ち、右手に宝塔を載せ、甲冑を着けた忿怒の形相をなす毘沙門天が半肉彫りされている。右に「天保十五甲年（一八四四）」、左に「六月吉日」、下部に「村中」と刻字されている。毘沙門天塔は、像を彫るものと文字を刻む塔の二種がある。圃場整備事業により現在は丸山に移されたが、元々は北組集落にあった。北方より泉沢へ入る悪霊から集落を護るために建立されたものであった。

毘沙門天は、古代インド神話で闇黒界に住む悪霊の長とされていたが、ヒンドゥー教では夜叉（鬼神）を従えて北方を守護し、財宝福徳を司る神として崇拝された。後に仏教に取り入れられ須弥山（仏法世界の中央にそびえ立つ高山）の四方四州を守護する四天王の一神となった。四天王とは四方を護る守護神で、東方は持国天、南方は増長天、西方は広目天、北方は毘沙門天（多門天）である。なお毘沙門天はバラモン教の十二天に取り入れられ、さらに七福神の中にも加えられた。甲冑を着けた勇ましい武将姿で武運の神として戦国時代の多くの武将に崇拝された。越後の雄・上杉謙信は戦陣に毘沙門天の「毘」の旗を掲げ臨んでいたことが知られている。

＊城南公民館だより「城南」平成23年5月15日発行

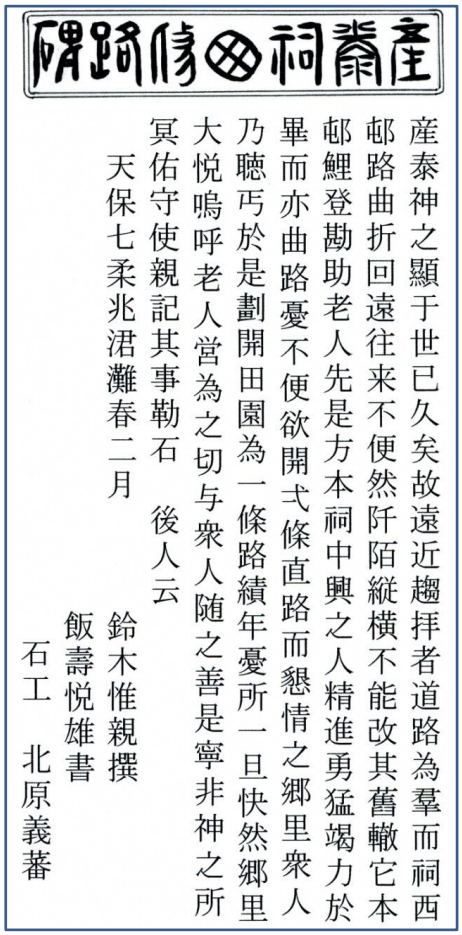
毘沙門天塔

75　産泰祠修路碑①（下大屋町）

西参道を登りつめ山門へ上る手前右奥の榊（さかき）の中にあり、次のような内容が刻字されている。

「産泰神は祀られてから久しく、遠方や近隣からお参りする者が多い。しかし、神社へ向かう西の参道は折れ曲がっている田畑の畔道（あぜみち）で狭く、往来する者は大変歩きづらく、それは参拝者のみならず地元民にとっても誠に不都合なことであった。下大屋の人たちが田畑の農作業で往復する際、担いでいた農具が参拝者とすれ違う時に事故が起きかねない状態であった。それを解消しようと新たな参道を開こうと、鯉登勘助老人は地域の人々に賛同を促した。老人の思いは強く勇猛果敢に行動し訴え続けた。その結果、老人の熱意に土地関係者も心を開き、田畑を切り開いてここに一条の新たな西参道が新設された。勘助老人の行動は産泰神社にとってまさに中興の人と言っても過言ではない。永年の懸案だった新設参道ができ、地元の人も大いに喜び皆が勘助老人の業績を讃（たた）え、この偉業を後世まで伝えんと碑を建てた」。石碑の篆額（てんがく）は「産泰祠修路碑」と刻され、その中央に刻まれているのは従来の屈曲している田畑の畦道（あぜみち）参道を表している。産泰神社はそれ以前、南向き社殿で南参道であった。建立されたのは天保七柔兆涒灘（じゅうちょうとんたん）（一八三六）春二月で、この時代は太陰暦で一月から三月を春季としていた。柔兆（じゅうちょう）は丙（ひのえ）、涒灘（とんたん）は申（さる）の年まわりを表す干支（えと）の異称である。

＊城南公民館だより「城南」平成23年6月15日発行


産泰祠修路碑

産泰神之顯于世已久矣故遠近趨拝者道路為羣而祠西
邨路曲折回遠往来不便然阡陌縦横不能改其舊轍它本
邨鯉登勘助老人先是方本祠中興之人精進勇猛竭力於
畢而亦曲路憂不便欲開弐條直路而懇情之郷里衆人
乃聴丐於是劃開田園為一條路績年憂所一旦快然郷里
大悦嗚呼老人営為之切与衆人随之善是寧非神之所
冥佑守使親記其事勒石　後人云
天保七柔兆涒灘春二月　　鈴木惟親撰
飯壽悦雄書
石工　北原義蕃

産泰祠修路碑

76　産泰祠修路碑②（下大屋町）

産泰神社はもともと南向き社殿、南参道であり、現在もその参道は残っている。元来、産泰神社のサンタイとは赤城信仰の三所明神を現わしたもと考えられる。三所明神とは、平安時代頃からの神仏習合により大沼（おの）は千手観音、小沼（この）は虚空蔵菩薩、地蔵岳は地蔵菩薩として信仰された。従って赤城神社は赤城山を背に南向きに建立され、社殿を拝礼することはその背後の赤城山を拝礼することになる。

慶長六年（一六〇一）平岩親吉（ちかよし）に替わって、徳川四天王の一人酒井河内守重忠が厩橋（うまやばし）城へ入城した。二代雅楽頭忠世（うたのかみただよ）のとき大胡領をあわせ十二万二千五百石の大身となった。その奥方の難産を救ったことで特別な庇護を受け、城の守護のため対峙（たいじ）するよう社殿を西向きに変えたと伝承されている。それ以降、三体から産泰になったようである。酒井忠世は二代将軍秀忠の家老、三代家光の傅（ふ）（お守役）となり重きをなしていた。

四代忠清は十五万石を領し大老となり幕府の中心で活躍した。

なお、忠清は江戸城の下馬札前に屋敷を構えていたことから下馬将軍といわれ権勢を誇った。しかし、五代将軍に館林城の綱吉を推す水戸光圀と対立し忠清は失脚した。慶安二年（四九）、五代忠清は幕府に申請し厩橋（うまやばし）から前橋に名称変更が許された。寛延二年（一七四九）九代忠恭（ただずみ）は、利根川の水害により城域が侵食され、また田の水害もあり姫路へ転封した。

＊城南公民館だより「城南」平成23年7月15日発行

鳥居から山門を望む

77　産泰祠修路碑③（下大屋町）

徳川氏の祖は三河国（愛知県東部）賀茂郡松平村の土豪で、家康の父広忠までは松平姓を名乗っていた。松平氏の出自は徳川四天王のうちの酒井氏である。従来、武家の棟梁たる征夷大将軍は清和源氏流以外からの就任はなく、それを意識し家康は南北朝時代の武将で清和源氏の流れをくむ上野国新田氏に着目した。新田領内世良田の「得川」の地名から好字をあて「徳川」と改めたというのが定説になっている。

江戸時代後期まで下大屋村字丸山に医楽寺という天台宗の寺院があった。しかし、下大屋村は水田面積が荒砥地区で最も少なく、従って収穫高も最下位だったので村人は神社と寺院を維持するのに難渋していた。そこで藩主に訴え村人は産泰神社の存続を選択し、医楽寺は富田村の天台宗正法院へ合併され廃寺になった。大正九年、赤城南麓の灌漑用水不足を解消するため大正用水の掘削が計画された。しかし、開始まもなく予算不足により計画は中断していた。戦時中の米不足を解消するため再開発し昭和二十年に一期工事区間が開通し、下大屋は開田化が進み一気に米の増産が得られるようになった。

産泰神社は安産祈願の神として江戸時代中期頃からは庶民の参拝者が多くなり、現在さらに繁栄する産泰神社を拝するとき、西参道の建設を推進した勘助老人の偉業はまさに中興の祖として後世まで讃えられるであろう。

＊城南公民館だより「城南」平成23年8月15日発行

産泰祠修路碑

78　二宮赤城神社の梵鐘①（二之宮町）

南鳥居北の右側に鐘楼がある。梵鐘は高さ一二七チセン、直径七二チセンで、上位の四区画面には五段五列、合わせて百個の乳が造りだされている。その下の池ノ間に「奉寄進鳧鐘一口　上野州勢多郡赤城山神宮寺」、「タラーウ（虚空蔵菩薩）、キリーク（千手観世音菩薩）、カ（地蔵菩薩）」、「正一位二宮大明神御宝前　干時元和九暦（一六二三）鶉首大淵献□月吉辰」、「願主　六谷田左衛門尉業繁　前長井内蔵之介繁次　長井喜左衛門尉」、「鋳師大工　埜州（栃木）天命住太田五郎左衛門」、その他代官や多くの旦那衆の名が刻銘されている。

梵鐘面に刻字されている「鳧鐘」は、中国の古伝説で鳧氏が鐘を造ったことによって名鐘の代名詞的に使われてきた。なお、刻まれている梵字の虚空蔵菩薩は小沼、千手観世音菩薩は大沼、地蔵菩薩は地蔵岳で、赤城の三所明神を表している。明治に至るまでの千百年余り神仏が習合され信仰されてきた。由緒ある神社には神宮寺という別当寺が置かれた。神宮寺が設けられない場合は付近の寺院が別当を務める場合もあった。建立年の「鶉首」は癸を、「大淵献」は亥のことで干支の異称である。市重要文化財に指定されている。

＊城南公民館だより「城南」平成23年9月15日発行

明治初年に移動された梵鐘

79　二宮赤城神社の梵鐘②（二之宮町）

天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉による小田原攻めで後北条氏は滅亡した。天下を平定した秀吉は徳川家康に関東入りを命じた。江戸へ入った家康は三河以来の家臣牧野康成を大胡領へ二万石で入封（にゅうほう）させた。その領内の二宮赤城神社は格式と由緒と伝統ある古社で、その神宮寺である玉蔵院（ぎょくぞういん）はさらに霊験あらたかである、として大胡城の祈願所として二の丸へ引寺した。その玉蔵院はかつて二宮赤城神社の南参道の西側に存在した。

明和五年（一七六八）の神社絵図によれば、梵鐘は随神門から拝殿へ向かう境内広場中央に存在していた。明治政府の神仏分離令により南鳥居東の千手観音堂脇へ移したことにより撤去から免れた。その千手観音堂は昭和三十八年まで存在した。重陽（ちょうよう）の節句（九月九日）には二之宮あげて観音祭りが行われ、参道には多くの露店が並び大変賑わった。太平洋戦争中の昭和十七年、戦争資材の金属不足による回収・供出は各家庭にまで及んだ。当然のことながら梵鐘も回収の対象になり、まさに供出によって出荷されようとしていた。しかし、「二宮赤城神社の釣鐘は由緒あるを以て供出せざるよう」と群馬県より指令がありその危機は免れた。現在、梵鐘を撞（つ）くのは三夜沢赤城神社との御神幸（ごじんこう）（四月と十二月の初辰の日）の発着時と大晦日である。

＊城南公民館だより「城南」平成23年10月15日発行

梵鐘回収無用記述（自治会蔵）

80　二宮赤城神社の御神幸①（二之宮町）

御神幸（ごじんこう）の神事は巳（み）の日に始まり、十二支の日が一巡する辰の日に至るまで境内は平穏に保たれる。完全な聖域状態のうち辰日の朝を迎え、御神体を納めた御神輿（おみこし）（長持型）を担ぎ、南鳥居の注連縄を切り、梵鐘の音を背に二宮赤城神社を出発する。御神幸の一行は宮司・神社総代二名・自治会役員二名・氏子十名（各組より一名）の総勢十五名である。

途中、大胡城内北辺にある近戸（ちかと）神社で、二宮赤城神社の宮司・総代二名・自治会役員二名立ち会いのもと、近戸神社宮司により御神幸の無事を祈願する神事が行われる。他の一行は神事が終了するまで社務所で休憩している。近戸神社を出発し、松並木の手前の柏倉の御輿懸（おこしかけ）で御神輿を石台に載せ休息する。ここで阿久澤家の人々の出迎えにより接待を受けお茶などをご馳走になる。

御輿懸を出発し松並木を過ぎると間もなく三夜沢赤城神社へ到着する。拝殿に御神輿を上げ、二宮赤城神社の宮司立会により、三夜沢赤城神社の宮司により神事が行われる。それ以外の一行は向拝（ごはい）前に整列し神事が終わるのを待つ。現在は一行すべて拝殿へ静座する。神事が終わると直会（なおらい）の後、帰路は何処へ立ち寄ることなく二宮赤城神社へ帰還し、御神体を納め御神幸の神事はすべて終了する。平成五年、御神幸は市重要無形民俗文化財として指定された。

＊城南公民館だより「城南」平成23年12月15日発行

二宮赤城神社を出発する御神幸

81　二宮赤城神社の御神幸②（二之宮町）

二宮赤城神社には、神御衣祭（御着せ替え）という神事がある。その神事は六十年に一度、壬子年に行われる。御神体に着せる神御衣は、歳を経た女性が綿を紡ぎ、布を織り、縫い上げ、丑の刻（午前二時）巫女により御神体に着せ、すべて一日の内に完了する。その際、針と糸は新しいものを用意し、神御衣を作る部屋は締め切り、作業する女性は白衣をまとい、白足袋を履き防息布（マスク）を付ける。神御衣は袷縫いで方一尺五寸（約四十五㌢）で、さらにこの上に着せる一廻り小さい方一尺（約三十㌢）の神御衣も作る。最後に行われた神御衣祭は、昭和四十七年（一九七二）壬子年で、次に神御衣作りが行われるのは二〇三一年（壬子年）になる。つまり、神御衣作りと御神体の御着せ替えは六十年ごとの壬子年に行われる。壬は水を司る年廻りである。この神事は赤城山から流れ下る水田への潤沢な灌漑用水を得るための祈願が込められた神事であることを現している。

徒歩の御神幸の時代、日の出とともに二宮赤城神社を出発したという。女堀沼の中道から荒口の東辺を通り、荒子の辻から西泉沢の通りを抜けるとやがて大胡に入る。二宮赤城神社の錦の御旗をなびかせ、白丁（白布の狩衣）が担ぐ御神輿の一行が町内に入ると、町内の人々は道沿いに出て「二宮様が通る」と言い、以前はお賽銭をあげる人もいたという。

＊城南公民館だより「城南」平成24年1月15日発行

大胡の近戸神社で休憩

82　二宮赤城神社の御神幸③（二之宮町）

阿久澤一族が柏倉へ移り住んだのは江戸時代前期で、その土地は二之宮村の村有山林であった。そこへ集落を構えることを認可してくれた恩義により、年二回の御神幸の際は御輿懸（おこしかけ）で待ち受け接待をするようになった、という伝承が残っている。明治になってから御輿懸の接待を辞めたら阿久澤一族に疫病が流行り、それは二宮赤城大明神の御神幸の接待を怠ったからであろうといわれた。それ以降、永々と柏倉の御輿懸のもてなしは継続されている。

赤城南麓の水田稲作はほとんど赤城山に源を発する水利の恩恵により成り立っている。里人は赤城山を遥拝（ようはい）することでその年の豊作を祈願した。やがてその象徴として社殿が建立された。それは赤城山を背面に南向きに建てられ、そこで拝礼することは背景にそびえる赤城山を遥拝したことになるのである。

御神幸の最大の目的は稲作の豊穣祈願と感謝のための神事である。春は二宮赤城神社から赤城山へ水田稲作のための豊富な灌漑用水を得られるよう山の神を迎えに行く。すると山から里へ下りた山の神は田の神となり稲作の豊穣を見守る。やがて秋になると五穀豊穣への感謝の意とともに田の神を山へ送りに行くと、田の神は山の神となり山を護る。元来、御神幸は水田稲作の灌漑用水を得るためと豊穣を祈願するための神事である。二宮赤城神社から山へ登り、赤城山の神を迎えに行き里へお連れする斎（いつき）（祭祀）が現在は三夜沢赤城神社との間で行われる。

＊城南公民館だより「城南」平成24年2月15日発行

ひたすら山を目指す御神幸

83　二宮赤城神社の御神幸④（二之宮町）

阿久澤一族が柏倉へ移り住んだのは江戸時代前期で、その土地は二之宮村の村有山林地であったと伝わっている。その時の恩義により年二回の御神幸の際は御輿懸（おこしかけ）で待ち受け接待をするようになった、という伝承が残っている。明治になってから御輿懸の接待を辞めたら阿久澤一族に疫病が流行り、それは二宮赤城大明神の御神幸の接待を怠ったからであろうといわれた。それ以降、永々と柏倉の御輿懸のもてなしは継続されている。

赤城南面の水田稲作はほとんど赤城山に源を発する水利の恩恵により成り立っている。里人は赤城山を遥拝（ようはい）することでその年の豊作を祈願した。やがてその象徴として社殿が建立された。それは赤城山を背面に南向きに建てられ、そこで拝礼することは背景にそびえる赤城山を遥拝したことになるのである。

御神幸の最大の目的は稲作の豊穣祈願と感謝のための神事である。春は二宮赤城神社から赤城山へ水田稲作のための豊富な灌漑用水を得られるよう山へ山の神を迎えに行く。すると山から里へ降りた山の神は田の神となり稲作の豊穣を見守る。やがて秋になると五穀豊穣への感謝の意とともに田の神を山へ送りに行くと、山の神になり山を護る。元来、御神幸は水田稲作の灌漑用水を得るためと豊穣を祈願するための神事である。二宮赤城神社から山へ登り、赤城山の神を迎えに行き里へお連れする斎（いつき）（祭祀）が現在は三夜沢赤城神社との間で行われる。

＊城南公民館だより「城南」平成24年2月15日発行

柏倉の御輿懸で休憩す

84　二宮赤城神社の御神幸⑤（二之宮町）

御神幸の祈願所として三夜沢赤城神社へ行き始めたのは南北朝時代頃と推定され、それ以前は深津の近戸神社と月田の近戸神社で休憩し、その後に御殿（粕川町中之沢湯ノ口）まで登り祈願した。粕川町月田の近戸神社の由緒記によれば「当国二宮赤城大明神、赤城山御殿ニ毎年、御饌米（ごせんまい）ヲ奉ルニ当社千鹿戸（ちかと）（近戸）大明神ニ御輿（みこし）ハ休ミ致シ候ヲ古例ト称ス」と記されている。その後、何らかの事情で斎（いつき）の場が粕川中之沢の御殿から現在の三夜沢へ移ったと考えられている。

今から一一九四年前、弘仁九年（八一八）七月に関東地方一帯に大地震が発生した。特に赤城南麓は各所で山体崩壊し、川をせき止め、やがて下流域へ大規模な泥流をもたらし水田をことごとく埋め尽くした。また家屋の倒壊などの被害が多く発生し人命も失われた。それからおよそ五百年後、大地震で山地形が崩壊しなだらかになった三代沢の地へ造立されたのが現在の三夜沢赤城神社と考察されている。三夜沢赤城神社境内で最古を示す宝塔は南北朝時代のもので、神社の年代記もその時代の貞和（じょうわ）元年（一三四五）から始まっている。

歩行で行われていた御神幸は、昭和四十四年から二之宮保育園のマイクロバスを借用しての御神幸となった。当時は神様を車に乗せていいものか、との論議もあったが、それ以降は車での御神幸が普通に行われている。

＊城南公民館だより「城南」平成24年3月15日発行

山の神を迎えるための斎場の三夜沢赤城神社

85　須永の馬頭観音（下増田町）

木造馬頭観音立像は須永公民館に安置され、縁日は十月十八日である。髪は火炎のごとく逆立ち、忿怒の形相で牙をむき頭部に馬頭を載せている。三面（三つの顔）八臂（八つの腕）像で彩色が施されている。左手の上位と下位の持ち物は欠損しているが、剣と金剛棒を備えていた可能性がある。中位の手は宝珠を持つ。右手の上位は斧、中位は念珠、下位は施無畏印をなし、胸前の手は明王馬口印を結ぶ。光背は古舟形光で、近世に造られた木像であろうか。

馬は勢いよく草を食み、力強く疾走する威力を持つ。それに観世音を合体させ、魔障（悪魔の障り）や悪趣（地獄・餓鬼・畜生の世界）から救われるよう古代インドで信仰された。馬頭観音はその忿怒の形相によって様々な魔障を砕き、悪趣の苦悩を断つといい、その姿は他の観音に比べ明王に近い性格を示している。

馬頭観音は七世紀頃に我が国へ渡来し平安時代に六観音の一つとして信仰された。しかし、江戸時代になると六道のうちの畜生道をつかさどる菩薩とされ民間信仰化するようになり、その後は運送など馬を扱う職業や農耕に牛馬を使う農民により家畜を護るという信仰に変わるようになった。つまり馬頭観音は本来、人を救うための菩薩であったが、やがて家畜の守護神として信仰されるように変化し信仰されるようになったが、現在は運送や農耕に馬は使われることはなった。

＊城南公民館だより「城南」平成24年4月15日発行

木造馬頭観音像

86　宮原の二十二夜塔（上増田町）

二十二夜塔は如意輪観音石像で薬師堂の境内にある。蓮華座に左右の足裏を合わせる輪王坐を組む、一面（顔）六臂（六つの腕）像である。左手の上位は、宝輪手をなしており、それは車が転がるような速さで衆生を救いに現れることを示している。中位の手は、蓮華手で蕾の蓮華は仏の心を表す。下位の手は、按山手で膝に手を置き、衆生を救うことに揺るぎないことを示す。右手の上位は、右足立膝に右肘を載せ、掌を右頬にかざす思惟手をなして衆生を救うため思案している姿を現わしている。中位の手は、持宝手で願いを意の如く叶えるための宝珠を持つ。下位の手は、念珠手で衆生の苦しみを救うための数珠を持っている。「文化二乙丑歳（一八〇五）霜月（十一月）吉日　女人講」と刻まれている。

如意輪観音は一般的に月待の十九夜・二十一夜・二十二夜待の主尊として祀られるが、群馬県内の中、西部地域では二十二夜待ちの主尊として祀られていることが圧倒的に多い。なお、如意輪観音は安産や子育てなどの主尊として女人が講を作って信仰した。正月と八月二十二日の年二回、婦人が順まわりに宿を定めて集まり、昼はうどん、夜は混ぜご飯で月の出を待ち祈願する講である。現在、月待講は全く姿を消し、如意輪観音像は役目を終えたかのようにひっそりと佇んでいる。

＊城南公民館だより「城南」平成24年5月15日発行

如意輪観音像

87　稲荷神社の岐塞神塔（小屋原町）

古来より悪霊や疫病は、他所から来る人たちが集落へ持ち込むものと考えられていた。そのため街道多くの人が往き来する辻に、悪霊や疫病が入って来ることを防ぐため道祖神が集落境の道端に建てられた。

伊邪那岐命と伊邪那美命は高天原の命により協力し島々や国など万物を産んだ。しかし伊邪那美命は、最後に産んだ火の神（迦具土神）によって陰を焼かれ黄泉国（死の国）へ旅立ってしまった。伊邪那岐命は、妻恋しさに黄泉国を訪れたが、そこには美しかった妻の姿ではなく、腐乱した遺体から悪臭が漂い見るに堪えない醜い姿に変わっていた。恐ろしくなり逃げ帰る伊邪那岐命に立ち塞がる幽鬼がいた。それを遮り護ったのが道反大神である。悪霊や疫病が道や辻から村に入ってくることを防ぐ神を岐神といい、後に岐神と道反大神が混合し塞神になった。塞神（岐神・道反大神）とさらにもう一度岐神を加えた形態が岐塞神であり、悪霊や疫病をより威力を持って防ぐというもので他に例を見ない。万延元年（一八六〇）庚申八月に建てられた。このような石造物は圃場整備事業などにより、従来の道路が消滅したため神社境内へ移された。

＊城南公民館だより「城南」平成24年6月15日発行

岐塞神塔

88　安養院の薬師如来（筑井町）

石像薬師如来坐像は本堂左側の薬師堂に祀られている。特に目にご利益があるとされ、願をかけ治ったらお礼のため顔にうどん粉を塗ることから白粉（おしろい）薬師といわれている。面相は丸くお礼のために塗られた粉で真っ白になっている。肩は丸味があり両手は定印（じょういん）（心を静め集中し瞑想（めいそう）の状態）を結ぶ。その上に載せていた薬壺は痕跡を残すのみで今は見られない。舟型の光背は上部左と右脇にやや欠落が見られる。刻銘はないが室町時代初期に造られたものと伝承され、全体的に磨滅が進んでおり時の経過が窺える。

薬師如来は、如来になる前の菩薩時代に十二の大願を誓って修行し、この請願を成しとげて如来になったという。如来になってからは東方瑠璃光浄土（るりこうじょうど）にいて、すべての人々の病気をいやし、飢えている者には食事を、貧しい者には衣服を、目の不自由な者にはよく見える目を与え、国の病（災禍（さいか））も治すという。つまり薬師如来は現世にあっても利益（りやく）をもたらす如来とされて以前は四月十七日が縁日で村の辻々までたくさんの灯籠が点され夜店がでて大変賑わったが、現在はお盆の時に祭りが行われている。

＊城南公民館だより「城南」平成24年7月15日発行

石像薬師如来坐像

89　中澤県道から国道五十号へ①（東大室町）

大正十五年、東大室から中澤直次県議会議員が誕生した。東大室には先駆的な思考も持つ人が多くそのような風土のなか、中澤県議も常に時代の先端を行く極めて進歩的な人であった。即実行型の人で常に公益に尽力を惜しまない八面六臂（ぴ）の活躍をした政治家であった。村内にまだラジオがない時代、自らラジオを組み立て天気予報を謄写（とうしゃ）印刷し配布したり、天気予報の標識旗を高く掲げ、田畑の作業や養蚕の桑切り作業など、特に養蚕農家に大いに寄与した。さらにタービン水車による発電機で電灯を燈し、他地区に先がけエンジンポンプの消防車を導入し地域消防の近代化も図った。

大室分校（現大室小学校）の鉄筋コンクリート建設を推進しそれは後に独立校の礎になった。昭和十七年の戦時下、干ばつに際し中断していた大正用水の通水工事の着工に東奔西走し一部区間を通水させた。また灌漑用の乾谷沼（いぬいやつぬま）の築堤も完成させ、なお鯉や鱒や鮎の養殖も手掛け戦時下の蛋白源を補おうと活動した。さらに大胡・玉村線や伊勢崎・女淵線など勢多郡内の道路拡幅や県道編入も実現した。また、北関東を横断する道路建設構想は極めて有益であると実現に心血を注いだ。そして群馬県庁前から石山間の新設県道は昭和六年に完成した。その功績から当時この道路は「中澤県道」と呼称されていた。

＊城南公民館だより「城南」平成24年8月15日発行

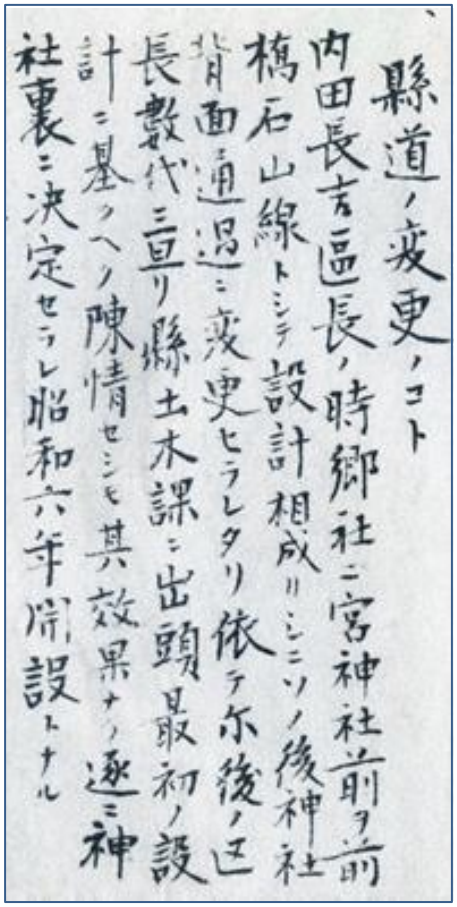
中澤直次県議会議員

90　中澤県道から国道五十号へ②（東大室町）

新設県道計画について、二之宮区は県土木課にある陳情を行っていた。それは新設県道を二宮赤城神社南の参道へ通過させ石山に至るということであった。しかし、再三の陳情にもかかわらずその願いは叶うことなく、神社の北側を通過することが決定された。しかし、現在における車社会の交通事情を鑑みればそれは現行のルートで良かったと考えられる。昭和八年、陸軍参謀本部から金沢正雄群馬県知事宛に通達があった。「昭和九年秋季（しゅうき）主トシテ群馬県 栃木県及ビ埼玉県地方ニ於テ陸軍特別大演習施行ノ旨（むね）御沙汰アラセラレタルニ付通牒（つうちょう）候也」と。

昭和九年までに前橋・水戸間の北関東横断道路は完成し、大演習の大本営（天皇直属の最高統帥（とうすい）機関）は群馬県庁に置かれた。そのため県庁は紅雲町の前橋中学校（後の県立前橋高校）へ移転し仮県庁とした。そのため前橋中学校は天川原町（現文京町・現県生涯学習センター）へ新築移転し、大演習後には行幸があり校庭に行幸記念碑が残っている。大演習が迫った十月に県衛生課は、大演習や行幸期間中にかかわる地域の衛生面の完備を期するため衛生警備隊を組織、厳重なる検病調査を実施し、準備は長期にわたり入念に行われた。

＊城南公民館だより「城南」平成24年9月15日発行


縣道ノ変更ノコト
内田長吉區長ノ時郷社ニ宮神社前ヲ前
槁石山線トシテ設計相成リシニソノ後神社
背面通過ニ変更セラレタリ依テ爾後ノ区
長數代ニ亘リ縣土木課ニ出頭最初ノ設
計ニ基クヘノ陳情セシモ其效果ナク遂ニ神
社裏ニ決定セラレ昭和六年開設トナル

県道の変更陳情ならずの記録

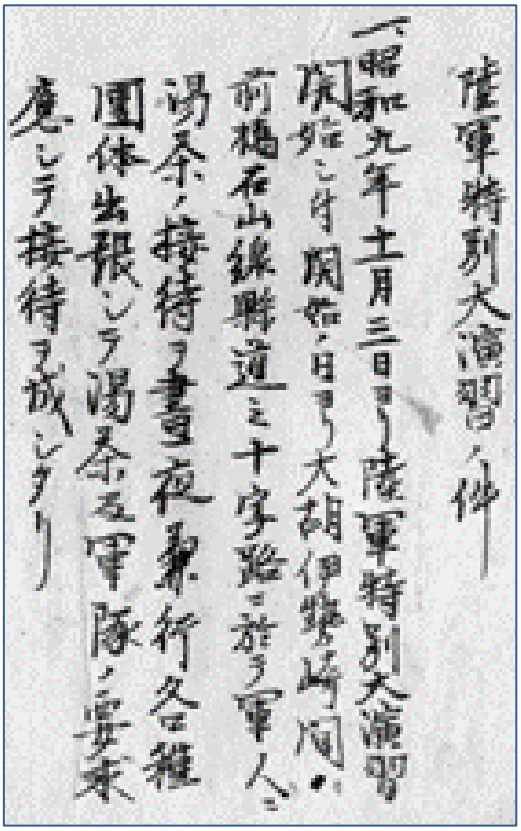
91　中澤県道から国道五十号へ③（東大室町）

米・英・日は共に中国大陸に権益を持っていたが、蒋介石が国内をほぼ統一したころから米・英は対応を変えるようになった。しかし、日本は大陸への侵攻を止めることがなかったため、米・英は日本を抑制するため次第に経済制裁の包囲網を固めていった。日本は南下するソ連にも脅威しつつ満州事変を勃発させ、昭和七年に満州国の建国を正当化した。さらにワシントン軍縮条約を破棄し国際社会から孤立の道を歩むことになった。

陸軍特別大演習は、厳寒の満州でソ連からの侵攻を意識して計画された。大演習の日程は昭和九年十一月十一日から十四日に設定し、関東平野を満州に見立て、群馬を中心に栃木・埼玉の三県を演習地とし十二万人の将兵により行われた。それは昭和天皇を大元帥とし統帥権確立の意義を国民に示し、国民の心を結束することにあった。中澤県道は演習の好適道路とされて延長され、北関東横断道路として計画されたようである。

十一日の演習は午前八時頃より栃木県佐野付近において戦闘状態になった。その後、西軍は高崎付近へ兵力を集結するべく夜半より行動を開始した。東軍は佐野付近から前橋へ向かい、西軍を利根川付近で掃滅するため急進させた。この行軍に際し、二之宮区は石山十字路と二之宮十字路間に人員を待機し軍人に湯茶の接待をした、という記録が残っている。

＊城南公民館だより「城南」平成24年10月15日発行


陸軍特別大演習ノ件
一昭和九年十一月三日ヨリ陸軍特別大演習
関東ニ於テ関東ノ日ヨリ大胡伊勢崎間ノ
前橋石山線聯道ニ十字路ニ於テ軍人ニ
湯茶ノ接待ヲ晝夜兼行各種
團体出張シテ湯茶ヲ軍隊ノ要求
應シテ接待ヲ成シタリ

軍人に湯茶接待を記す文書。3日は11日の誤記。（自治会所蔵）

92　中澤県道から国道五十号へ④（東大室町）

陸軍大演習終了後の十五日、天皇は前橋市内の施設や赤城山などへ巡幸した。その夜、巡行先導役を済ませた本多重平警部は、大任を果たした安堵感に浸りながら就寝した。夜中に突然電話があり「明十六日桐生地区の巡幸先導責任者が急病になったので代わりを頼む」という上司からの通達であった。桐生の先導は道路事情など不案内と固辞したら「運転手は長期に演習をしており、ただ乗車していればよい」との度重なる説得に本多警部は渋々承服した。

十六日、一万七千人余の桐生市民が道路の両側に座っての奉迎と、壮麗な飾り付けに運転手はすっかり気が動転した。桐生西尋常小学校へ向かう予定を、末広町一丁目の交差点を左折せず直進し、二番目巡幸先の桐生高等工業学校（現群馬大学工学部）へ到着してしまった。この事件を鹵簿（ろぼ）（行幸）誤導事件という。巡幸終了後、本多警部は警察官二名の監視のもと自宅謹慎していた。十九日朝、皇居へ還御（かんぎょ）する天皇の見送りを前橋駅へ家族と監視警察官を強引に行かせ、自宅で発御（はつぎょ）（天皇の出発）の花火の音を聞きつつ本多警部は自決を謀（はか）った。

昭和二十一年、人間宣言を行った天皇は戦争で傷ついた国民を励ますため全国を巡幸した。一命を取り留めた本多は戦前と戦後の天皇の在り方に自問自答する日々が続いた。前橋への巡幸後、自決の新聞記事や全国から寄せられた手紙を燃やした。それが本多にとって誤導事件の終息を示すものであった。

＊城南公民館だより「城南」平成24年11月15日発行

本多警部自殺未遂
御発輦の花火を合図に

本多警部自決未遂事件の記事

93　中澤県道から国道五十号へ⑤（東大室町）

昭和天皇行幸の誤導事件の翌年に赴任した君島清吉群馬県知事は、不名誉な汚名を払拭（ふっしょく）するべく、県下一斉に古墳の所在・規模・現状などを調査するよう指示した。それは文化的な成果として昭和十年『上毛古墳綜覧』として編集された。この地域では国道五十号線は当初、俗称で「中澤県道」と呼称されていた。昭和二十八年五月十八日二級国道五十号線になり、昭和三十八年四月一日に一級国道になった。

昭和三十年代後半、夜間にバイクで日本赤十字病院前を出発し、二宮赤城神社裏まで現在では考えられないわずかな時間で到着することができた。その理由は信号機が全く無かったからである。ちなみに二之宮十字路に信号機が設置されたのは昭和四十一年で、小島田十字路と石山十字路は昭和四十六年であった。それから四十数年経過した現在、日本赤十字病院前から二宮赤城神社裏まで信号機は何機あるかご存じであろうか？（文末を参照）

中澤直次県議は、郷土にかぎりなく貢献した稀有（けう）な政治家で、特に大正用水の掘削は赤城南麓の水田耕作にとって筆舌に尽くし難い功績である。惜しむらくは長期に亘る過労により昭和二十年に六十歳の若さで急逝されたことである。氏の功績を偲び三十一年、荒砥村役場（荒子町）へ顕彰碑が建立された。合併により顕彰碑は城南村役場（現前橋市城南支所）へ移転され、今も国道五十号線を見守るかのように立っている。（信号機は二十四基）

＊城南公民館だより「城南」平成24年12月15日発行

国道を見守るかのよう会に建つ中澤直次県議議員の顕彰碑

94　宮本の観音石堂（二之宮町）

石堂の屋蓋（やがい）は寄棟造りで、棟を持ち屋根には反りが見られ、下り棟の端部は厚みを帯び、化粧垂木（たるき）が造り出されている。室部正面中央には向拝（ごはい）口があり、内部は龕状（がんじょう）（仏像を内蔵するような彫り込みがある）に彫られている。その左右上部には連子（れんじ）状の孔（こう）が造作されている。基台の下部は中央が緩やかに刳（えぐ）られており四脚で支える形になっている。観音石堂は磯部良雄氏宅地内にある。

室部の刻字は磨滅が著しく「□□□□　観音　□妙□尼　敬白　文明十七□□□□」、とわずかに判読されるのみである。室町時代中頃の文明十七年（一四八五）、尼僧が供養のために石堂に観音像を祀ったものである。聖観音菩薩は、人々の苦しみの声を聴き、漏らすことなく救ってくれる崇高で偉大な菩薩として多く信仰されている。

石堂内には聖観音が祀られるはずであるが如意輪観音が祀られている。如意輪観音像は、右膝を立ててその上に右肘を載せ、掌を右頬にかざすのが本来の姿である。この像は足と手が左右逆転している。石堂は刻銘から室町時代中頃、如意輪観音は江戸時代後期頃のもので両者の年代は合致しないので、如意輪観音は後に祀られたものと考察される。

＊城南公民館だより「城南」平成25年1月15日発行

室部を載せる基礎がアーチ状に造られている観音石堂

95　梵字大黒天塔（泉沢町）

大黒天塔は、上部に日月と雲流、中央に梵字で大黒天が朴筆体（ヘラ書き）で深く刻まれている。裏面に建立者十名と建立年「富暦八戊寅（一七五八）余々八日」が刻字されている。「富」は「宝」の古字で、「余々」の「余」は十で、「余々は二十を表し二十八日で圓明寺の境内にある。裏面に建立年「文化元甲子年（一八〇四）十二月吉日」と「子待連中十人」の字がある。マカギャラヤは梵字の切り継ぎで、二文字以上を結合させ一字として大黒天を表す。一般的に梵字塔は少なく「大黒天」と刻まれた文字塔が多い。

大黒天はインドのヒンドゥー教のシヴァ神の眷属（仏や菩薩に付き従うもの）であったが、その後は仏教に取り入れられインドや中国では古くから寺院の守護神とされ、また豊穣を司る神であった。わが国では護法善神とし食堂に祀られた。後に天下を経営していた出雲の大国主命と習合・同一神として信仰され、近世以降は七福神に入れられ恵比寿とともに福の神の代表的な存在になった。

ネズミを大黒天の使者とし、甲子年の甲子日に御馳走を供え、講の人達と子の刻（夜十二時前後の二時間）まで寝ることなく祀るのが甲子講である。ちなみに高校野球の殿堂といわれる球場は大正十三年（一九二四）甲子の年に造られたので、甲子園球場の名称を冠している。

＊城南公民館だより「城南」平成25年2月15日発行

梵字の大黒天塔

96　三柱神社の堅牢地神塔（富田町）

神社本殿の右にあり石塔の中央に「堅牢地神」と大書され、揮毫は「行妙書」とある。「嘉永元年（一八四八）戊申八月社日建」の刻字があり、地神講の人達によって建てられた。

春分・秋分に最も近い戊の日を「社日」といい、地神を祀る講を「地神講」や「社日講」という。春の社日に山の神は山を降り里へ下り田の神となり、農民に豊作という結果を祈願されて祀られる。収穫祭が終わると、秋の社日に田の神は再び山へ帰って山の神となり、猟師や森林業の人々に信仰されている。そして、春と秋の社日は地神の祭りの日とされ、その日は土を動かしてはいけないという禁忌の風習があり、農家の人たちは田畑の仕事をしないことになっている。社日には当番の家に集まり豊作祈願や講中の親睦のための会食を行うのが地神講（社日講）である。

地神は地母神的な性格を持つ神で大地を神とする原始信仰で地祇ともいう。地神は平安時代末期になると仏教の守護神である十二天（四方・四隅・天・地・日・月の神）のうちの地天とも習合され、堅牢地神となった。

＊城南公民館だより「城南」平成25年3月15日発行

堅牢地神塔

97　人の一生いつも木の芽の…（東大室町）

「人の一生いつも木の芽の吹くように」と詠まれている。政府は戦後の財政再建をする一策として、市町村合策を諮（はか）るため、昭和三十一年「新市町村建設促進法」により合併を推進した。三十二年一月二十日、木瀬村と荒砥村は合併し、赤城南麓の地域なので「城南村」として誕生した。しかし、下長磯と小島田地区は住民投票を行い十月十日に前橋市への合併を決定した。駒形町も前橋市へ合併する運動が高まり紛糾（ふんきゅう）し、三十五年四月一日前橋市へ合併した。

城南村は、木瀬地区（笂井・小屋原・上増田・下増田・下大島）と荒砥地区（十一大字）は、三十五年十月三十一日新たな城南村として出発することになった。しかし、永い間の紛争によってそのしこりが村政の妨げになっていた。それらを払拭（ふっしょく）し和やかな村になるよう松野自得翁へ合併記念の俳句を依頼した。国道五十号沿線に城南村役場の新庁舎が建設され、南駐車場南に句碑が建立された。三十六年九月二日、句碑の除幕式と庁舎竣工祝賀会が行われた。

その後、城南村誕生から十年が経過し、様々な状況から前橋市への合併機運が高まり、一部強行反対運動もあったが、四十二年五月一日に城南村は前橋市へ合併した。現在は様々な合併紛争など無かったかのように穏やかで、自得翁が詠んだように和やかな前橋市の城南地区が存在している。

＊城南公民館だより「城南」平成25年4月15日発行

松野自得の庁舎竣工記念句碑

98　八坂用水①（笂井町）

八坂用水は江戸幕府（一六〇三）が開かれてから約一〇〇年後、桃木川から伊勢崎領の水田へ灌漑用水を引くため掘削された用水路である。天和元年（一六八一）、厩橋四代城主酒井忠清は二男忠寛に二万石を分与し、伊勢崎陣屋としたことから忠寛は大名に列せられた。陣屋は広瀬川東岸の現伊勢崎市立北小学校付近に置かれた。この時代は三万石以上でないと本格的な城閣構築は許されなかった。伊勢崎陣屋は本丸を囲むように二の丸があり、陣屋とはいえほぼ城郭に近い構築がなされていた。しかし、水田は例年の水不足により飢饉が続き、さらに参勤交代による費用など藩の経営は困難を極めていた。

藩財政の困窮はそのまま農民にも及び、何と七公三民（米の収穫量七割が年貢）という重税を課していた。農民にとってそれは極めて苛酷なもので、年貢米の改善を直訴する事件が頻発した。一部の家臣を村へ居住させ、農業をさせながら城へ出勤させるというほど財政は困窮していた。そこで慢性的な水不足を解消するため、水量豊富な桃木川の水を伊勢崎領内へ引くということを画策した。小畠武尭を総括責任者とし、地元の地形などに明るい八坂村の阿久津藤右衛門と鈴得六右衛門の協力を得て用水堀の掘削計画を策定した。それは笂井村を流れる桃木川から増田村・二之宮村を通過し、領内の八坂村から華蔵寺の南で南流する在来の小河川まで掘削するというものであった。

＊城南公民館だより「城南」平成25年5月15日発行

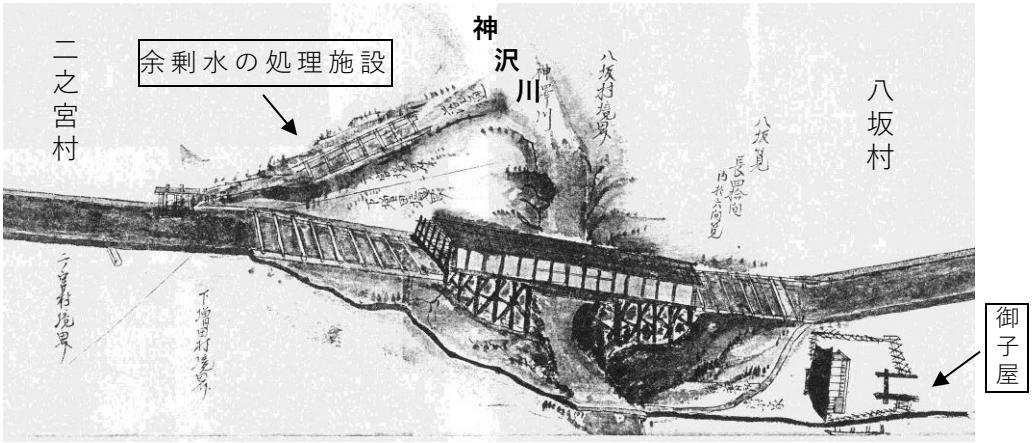
八坂用水（上増田町地内）

99　八坂用水②（笂井町）

江戸時代初め、笂井村の桃木川から増田堀という用水路が掘削された。この事業を手掛けたのは増田村東組の北爪五郎右衛門で、その功績から取水口と水路は五郎右衛門堰（せき）・五郎右衛門堀と呼ばれていた。永年、灌漑用水不足であった伊勢崎領はこの堀をさらに東へ掘削し領内の水田へ引水する計画を立てた。そこで通過地点の笂井村と増田堀の受益者である増田村、用水堀の新規掘削通過地点の二之宮村と協議を行い実施することとした。計画予定地を南流する荒砥川は木製の樋で渡河し、二之宮村地内は赤城南麓末端の台地を掘削する。二之宮村南端の新土塚東側を流れる神沢川も木製樋で渡河し八坂村地内の伊勢崎領に至る。そこからさらに東進し華蔵寺南で南流する在来の河川へ落水するルートである。

八坂用水による増田堀の再掘削は、川幅が一丈（約三メートル）を超えないよう笂井村と伊勢崎町の間で協議された。それは、用水路の川幅が拡大すると流水量が増し、それに接する笂井村の家屋敷は湿地化し、また降雨による増水で水害に遭う恐れがあるからである。そのため笂井村と伊勢崎側で「地窪（ぢくぼ）」と称する約定が交わされ、湿地化や水害が発生した場合は、伊勢崎側がすべて保障をすることが定められた。

＊城南公民館だより「城南」平成25年6月15日発行



八坂用水は神沢川を渡河する八坂樋と御小屋の図

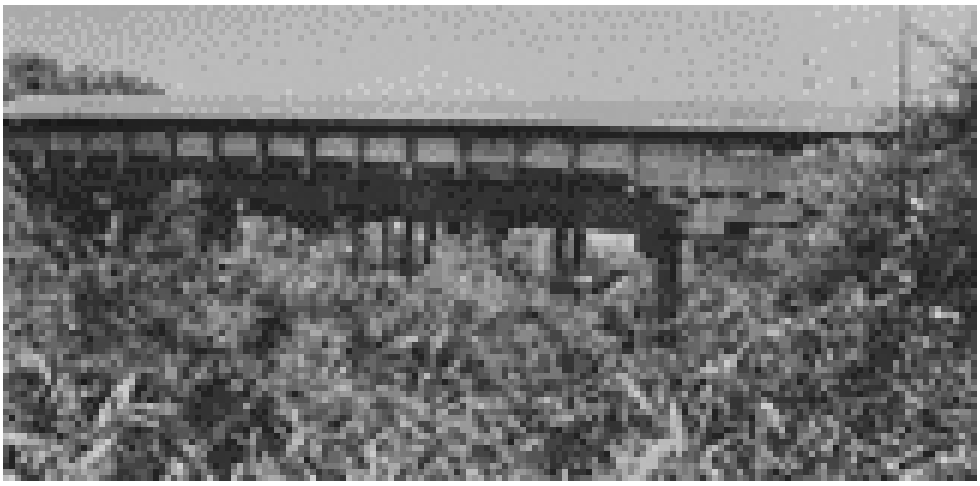
100　八坂用水③（笂井町）

八坂用水の「地窪（ちくぼ）（約定書）」には①用水の幅は一丈（約三メートル）とする。②取水口の普請については笂井村と伊勢崎側で双方が困らないよう相談の上で実施する。③笂井村の用水路にかかる橋の経費について今回は伊勢崎側で負担するが、今後は笂井村で負担する。④用水路に面した笂井村地内の家が大雨による川の増水で被害を被った場合は水抜き堀を掘り、その地代として一年五両ずつ伊勢崎より納入する、等が記されていた。

当時は測量器具も乏しく掘削予定地の高低測量は線香やろうそくを点して夜間に行った。測量には三ヵ年を費やしたが、掘削工事は一ヵ年で完了し宝永（ほうえい）三年（一七〇六）に竣工した。従来の年貢米は約一六、三八〇俵であったが、用水完成後は二〇、九〇〇俵で、四、五二〇俵も増収した。

その後、嘉永七年（一八五四）の約定書取り決めには、伊勢崎町の年寄、名主、笂井村の関係者や名主と長百姓（組頭）が出席し、上増田村二名（名主、村役）と、二之宮村三名（この時期以降は二之宮村は領主が三分割されていたので名主が三人いた）、前橋町から一名の立会人が出ている。約定書の取り決めは時代の変化に応じ、契約を更新しながら笂井の地窪関係者と八坂用水（八坂堰水利組合）の関係は現在も続いている。

＊城南公民館だより「城南」平成25年7月15日発行



神沢川を渡河する八坂樋は昭和２年まで使用された

101　八坂用水④（筑井町）

八坂用水の使用については、増田村の田植がほぼ終了するまでは伊勢崎領への引水を行わないこと。領主がお国替になっても取決め内容は変更しないこと。また時代の変化に伴い地窪関係者と八坂用水の関係は継続された。元文元年（一七三六）に八坂樋の大修理が、天保三年（一八三二）に八坂樋（神沢川の渡河）の架け替えが行われた。八坂樋は維持管理が難しいため、八坂樋の脇には監視役人が常駐する御小屋があり、その役目は大雨で増水する際に樋の手前で余剰排水を神沢川へ落水することであった。

大正十一年（一九二二）粕川左岸側の采女村、境町、剛志村、世良田村、埴蓮村は旱魃により大被害を被った。翌年、佐波新田用水耕地整理組合を設立し、広瀬桃木両堰水利組合へ用水供給の申し入れをし、八坂堰水利組合との間にその契約が成立した。華蔵寺南の八坂用水を東進させ粕川をサイフォン（地下水路）で横断する工事で、昭和二年（一九二七）に完成した。粕川横断より下流は佐波新田用水という。この工事で水路は二之宮南端の新土塚地区へ右折せず、新井地区へ直進し神沢川に至る間は「新堀」と俗称されている。神沢川はコンクリートの樋で渡河し二〇二年間使用された八坂樋は役割を終えた。現在は神沢川の下をサイフォンで渡河している。

＊城南公民だより「城南」平成25年8月15日発行

実線は新堀で破線は旧八坂用水

102　阿部霞堂（荒口町）

霞堂は名を正雄といい明治九年荒口村に生まれた。阿部家は祖父章作に至るまで代々淀侯（山城国淀城主稲葉丹後守）の地代官を務めた。明治維新後は、群馬第八大区第四小区長や荒口村他七カ村連合戸長を歴任した。父桂太郎は明治六年開校の荒口小学校で教鞭をとった。正雄は前橋中学校を出たあと、前橋在住の森霞巌（父は森東渓）の門で富田の町田玉穂とともに絵を学んだ。他に内海狐巌、吉田東巌など数十名の門人がいた。森霞巌の父東渓は川越藩松平家のお抱え絵師であったが明治維新後は前橋へ移り住んだ。

正雄は一年余りで霞巌の門を出て上京し、荒木寛畝に花鳥画の教えを受けウズラの図を好んで描いた。その後、南画を川合玉堂に師事した。雅号は最初の師霞巌と最後の師玉堂より各々一字をとり霞堂とした。明治三十五年大阪の研究展覧会に入選し一躍その存在が認められた。信州善光寺大広間の床の間を飾る大作は著名なものである。霞堂はこの時期すでにカメラを持ち、画題を求め各地をめぐり、自宅の暗室で現像・焼き付けを行っている。明治四十三年波志江の高野家で画会を開き、帰宅後に急病を発し三十五歳の若さで没した。惜しむらくは短命ゆえに作品が少なく全国的に流布し得なかったことである。

＊城南公民館だより「城南」平成25年9月15日発行

秋季渓韻図　p

103　町田玉穂（富田町）

幼少より絵を描くことを好んだ直吉は、明治五年三月二十五日富田村に生まれた。祖父長五郎は富田村の戸長（村長）など村役を歴任し地域に貢献した。当時、直吉が絵を学ぶことができた背景には、町田家がそれを許す経済基盤があったからであろう。直吉は荒口村の阿部霞堂（かどう）と共に前橋の森霞巌（かがん）（父は川越藩お抱え絵師森東渓）の門に学び直巌（ちょくがん）と号した。後に上京し川合玉堂に師事し号を玉穂（ぎょくすい）と改めた。前橋で森霞巌に学んだ時と同様、荒口村の阿部霞堂とは玉堂の門でも同輩として学んだ。

玉穂は様々な四季の山水画や中国の景観山水画を好んで描いている。なお、玉穂は健康にも恵まれ六十代に至るまで画家として活躍したので多くの作品を残している。そのため郷土には数多の作品が保有されている。明治四十年七月、日本絵画大展覧会に出品した『雨後の月』が特選になり、皇太子殿下（後の大正天皇）が自ら選んで購入したことにより、一挙に知名度が上がり全国的な画人として知られることになった。

なお、熊本市の博覧会では一等金牌賞を、また大阪市の絵画博覧会で正十八金実力画士賞を受賞し、後進の指導にもあたった。昭和九年十一月四日に享年六十三で没し、三十九名の弟子による墓誌がある。

＊城南公民館だより「城南」平成25年10月15日発行

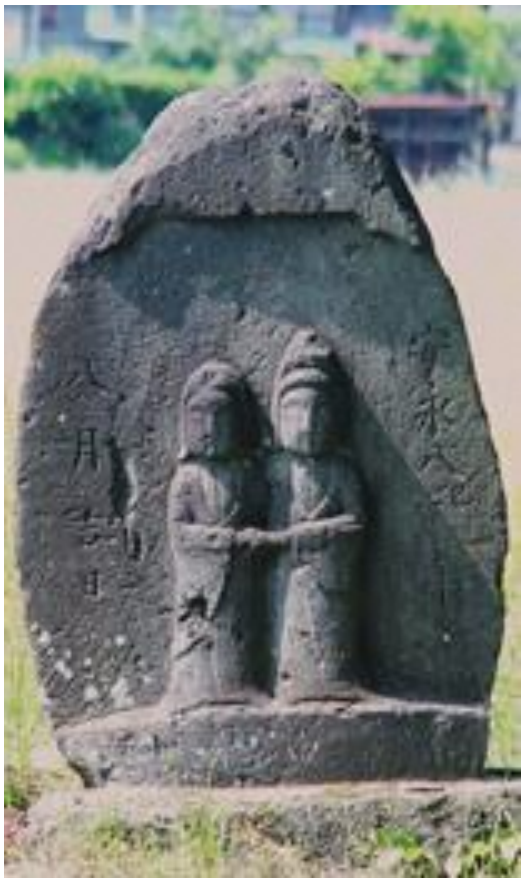
蓬莱山図

104　丸山の双体道祖神①（泉沢町）

西泉沢の集落にあったが圃場整備事業により現在地へ移動された。楕円状の上部を天蓋（てんがい）状に残し、向かって右に男神、左に女神が半肉彫りされている。両神は手を握り合い、互いに肩を抱き合う仲睦まじい姿で立っている。右側に「安永八 己亥（つちのとい）年（一七七九）」、左に「八月吉日」、下位に「東 さんたい神社 南 いせさき 北 大胡」と刻字され、道しるべの役割も果していた。この刻字から双体道祖神は泉沢北部の三本辻にあり、西を背に東向きに据えられしていたことが想定される。

天孫・邇邇芸命（ににぎのみこと）が豊葦原瑞穂国（とよあしはらみずほのくに）（日本）へ降臨した際、行く手を塞ぐものがいた。「前方を遮（さえぎ）るものは誰か調べよ」との命に、付き従っていた天宇受売命（あめのうずめのみこと）が「そなたは誰か」と問うと、「我は国津神（くにつかみ）・猨田毘古命（さるたひこのみこと）と申し天津神（あまつかみ）が天降（あも）りされると聞き、御先導申し上げようと出迎えに来たのだ」と答えた。そこで邇邇芸命は案内を命じ、猨田毘古命は天上天下を照らして先導し、無事に案内することができた。その後、邇邇芸命は天宇受売命に「せっかく国津神に出会ったのだから猨田毘古命に仕えるがよい」といわれ神婚した。それ以降、天宇受売命は猨女君（さるめのきみ）と呼ばれ子孫は神楽・技芸の祖神と仰がれ祀られた。双体道祖神は道路を護る神となり、男神は猨田毘古命で女神は天宇受売命である。

＊城南公民館だより「城南」平成25年11月15日発行



安永の双体道祖神

105　丸山の双体道祖神②（泉沢町）

伊邪那美命は最後に生んだ火の神（天加具土神）により焼け死んでしまう。伊邪那岐命は最愛の妻に逢いたくて黄泉国を訪れた。しかし、美しかった妻は醜く変貌し見るに堪えない姿になっていた。その恐ろしさに伊邪那岐命は黄泉比良坂を逃げ帰るとき、それを遮る幽鬼がいたが、それから護ったのが道反大神である。道反大神は岐神と混合し塞神と呼ばれるようになり後に道祖神となった。昔から悪霊や疫病は道から入ってくるものと考えられ、それを防ぐため道祖神は集落へ入る村はずれに建てられ、道路や旅人の安全を護る神として信仰された。

上部を天蓋状に造り向かって右に男神、左に女神が半肉彫りされている。大きな御幣を男神が右手で持ち、左手は笏を持っている。女神は左手で男神の袖をしっかりと掴んでいる。右に「天保十五甲辰年（一八四四）」、左に「三月吉日」と刻字されている。男神は猨田毘古命、女神は天宇受売命である。天孫降臨の際、邇邇芸命に従う天宇受売命は道案内で出迎えた国津神・猨田毘古命と出会い、二神は邇邇芸命の奨めで神婚し道路を護る神となった。

＊城南公民館だより「城南」平成25年12月15日発行

天保の双体道祖神

106　近戸神社の千手観音（上増田町）

山型にしつらえた光背に、半肉彫りの千手観音石造は蓮台に立つ。千手観音は正式には千手千眼観自在菩薩といい、頭部は十一面観音と同様で、中央に阿弥陀如来の化仏、その下の周囲に十の菩薩面を有し十一面となる。肩から条帛をまとい、腰には裙を着け、両肩から足元へ天衣をかける。柔和で豊満な面持ちをなし胸元で合掌する。肩から脇下にかけ左右合わせ十の手があり、上位の左手には戟鞘（矛状）という武器、右手には錫杖を持つ。千手観音は、千の手とその手のそれぞれに眼を備え、世の中のあらゆる人々の悩みを、眼で見て手を差しのべて救済しようとする菩薩である。本像の十の手は一つの手が百の働きを行う即ち合わせて千手となる。

石像の背面に「明治二巳七月吉日　當村中」の刻銘がある。その前年の慶応四年（一八六八）三月、明治新政府から「神仏分離令」が発布され、それが廃仏毀釈運動に発展し各地で多くの仏像や石仏は壊された。その時期にこの千手観音は造立されている。宮下地区の人々の深い信仰心が見受けられる。赤城山の信仰は平安時代頃から大沼は千手観音、小沼は虚空蔵菩薩として信仰された。南北朝時代には、地蔵信仰が盛んになり地蔵岳に地蔵菩薩があてられ赤城信仰は三所明神となった。赤城南面の近戸神社（赤城神社）は、神仏習合で千手観音を本地仏（神が仏の姿で現れる）として祀る神社が多い。宮下地区の観音祭りは十月九日に行われる。

＊城南公民館だより「城南」平成26年1月15日発行

天石造千手観音立像

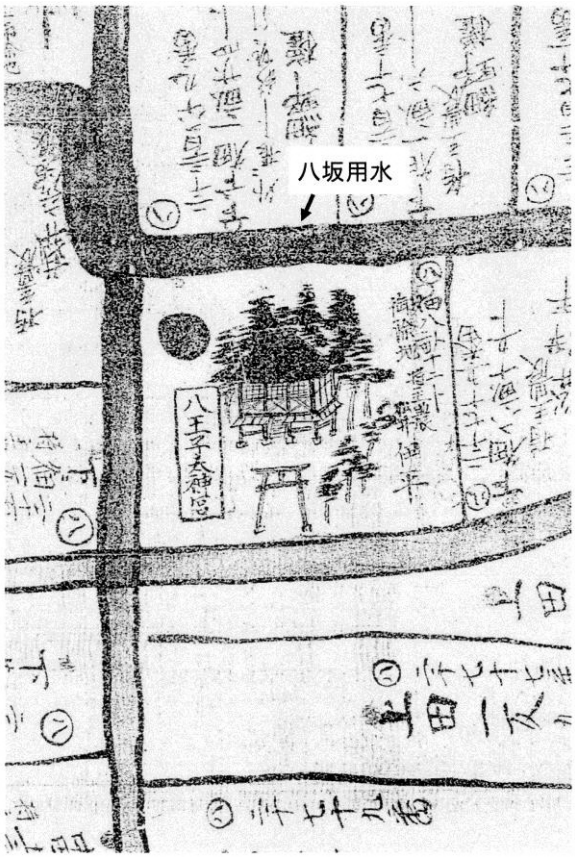
107　八王子考①（二之宮町）

二之宮町南部の八坂用水南にかつて八王子権現が祀られていた。そのためこの地は八王子と呼ばれている。拝殿は茅葺で間口四間、奥行二間、本殿の覆屋は茅葺で間口一間三尺、奥行三間が存在した。慶応四年（一八六八）、「神仏分離令」によって、「八王子太神宮」の社号は仏教神社ということで「八柱神社」に改称された。祭神の「八王子権現」は天照大御神と須佐之男命との誓約によって生まれた八人の王子を「八王子神」として神道系に改められた。

明治三十九年には「神社合祀令（一町村一神社制）」が発せられ、村内の各集落に祀られていた神社は鎮守へ合祀させられることになり、四十年に八王子の「八柱神社」二宮赤城神社へ合祀された。「合祀令」の発令によって、全国各地の各集落で信仰し祀っていた神社や祭礼が無くなり、そのことにより各地で騒乱が勃発した。

八王子権現は、インド須弥山の山麓にある豊饒国の牛頭天王と妃の婆利采女との間に生まれた八王子で後に八王子権現と名付け祀られた。牛頭天王やその子・八王子権現は除疫神として信仰された。権現とは、仏教の仏や菩薩が衆生を救うため権に神の姿で現れることである。

＊城南公民館だより「城南」平成26年2月15日発行



「八王子太神宮」を記す壬申（明治五年＝1872）地券地引絵図

108 八王子考②（二之宮町）

八王子地区は、インドの祇園精舎（釈迦の説法僧房）の守護神で薬師如来の垂迹（仏や菩薩が仮の姿で現れる）とされる除疫神・牛頭天王の八人の王子神を祀っていたが、明治政府が発令した慶応四年（一八六八）の「神仏分離令」によって社号と祭神を改称されたことは前述した。

伊邪那岐命は黄泉国（死の国）へ伊邪那美命に逢いに行き身が穢れ、禊ぎ払いによって生まれのが、天照大御神（高天原）、月読命（夜）、須佐之男命（海）で、伊邪那岐命にそれぞれの世界の支配を命じた。しかし、須佐之男命は使命を果たさず父・伊邪那岐命から追放された。須佐之男命は、姉・天照大御神に別れを告げに行ったが、高天原を奪いに来たと誤解され、誓約（神に祈って吉凶を占う）をしようと天照大御神が提案した。

天照大御神が弟の十拳の剣を口で噛み砕き息を吹き出すと、多紀理毘賣命・市寸嶋毘賣命・多岐都比賣命の三柱の女神が生まれた。須佐之男命が姉の勾玉を口で噛み砕き息を吹き出すと、天之忍穂耳命・天之菩卑能命・天津日子根命・活津日子根命・熊野久須毘命の五柱の男神が生まれた。この時に生まれたのが日本神話の八柱神である。しかし、現在も各地の神社で盛んに行われている夏越しの「茅の輪くぐり」は仏教神・牛頭天王が伝授した疫病除けの法である。

＊城南公民館だより「城南」平成26年3月15日発行

「八王子大神宮」の社額

109　諏訪社の彌五郎殿石祠（上増田町）

宮原の諏訪社境内に「彌五郎殿　寛政八丙辰（一七九六）六月吉日」と刻銘された石祠がある。後醍醐天皇の忠臣楠木正成が敗死の後、長子の正行は南朝軍の将として一族を率いて北朝の足利尊氏軍に対抗した。正平三年（一三四八）、正行は尊氏の執事高師直の大軍と河内四条畷（大阪府東部）で激戦を繰り広げ壮絶な戦死をとげた。楠木軍に従って参戦した堀田彌五郎正泰も同じく戦死した勇将であった。彌五郎は生前に大己貴命と武内宿禰を崇敬し祭神として社を建立していた。彌五郎亡き後、忠君の将であった彌五郎を称え、この社は後年に「彌五郎殿」とされ崇拝されるようになった。寛政八年、宮原の人達は彌五郎の主君への忠義心を崇敬し建立したのであろう。

元弘三年（一三三三）六月、後醍醐天皇は新田義貞や足利尊氏らの協力を得て鎌倉幕府を倒し建武の新政を成就した。しかし、建武三年（一三三六）、足利尊氏は謀反を企て光明天皇を擁立し北朝を立てたため、後醍醐天皇は吉野に逃れそこを南朝とした。当初は北朝方が優勢であったが、その後足利幕府内に観応の擾乱（一三五〇）という内紛が勃発し、全国は尊氏方と弟直義方に分かれて争った。その要因は尊氏の執事高師直と直義との抗争に始まり、体勢不利となり直義は鎌倉に逃れたが殺害された。赤城南麓の藤原秀郷流足利一門の山上氏、大胡氏らは尊氏方に就いて奮戦した。

＊城南公民館だより「城南」平成26年4月15日発行

彌五郎殿石祠

110　諏訪社の居森殿石祠（上増田町）

室部の側面に「居森殿　寛政八丙辰（一七九六）六月吉日」の刻銘がある。インドの牛頭天王が旅に出た折、裕福な巨丹将来の家に一夜の宿を求めたがそれは叶わず泊めて貰えなかった。次に訪れた巨丹将来の兄・蘇民将来は貧しいにも拘らず快く迎え泊めてくれた。牛頭天王は大変喜び自分の正体を明かし「近々この村に死の病が流行るがお前の一族は皆助けてやる」と言った。そして快く持てなしてくれた礼に悪疫防禦のまじないを授け「後にもし疫気があるときは、この一族は蘇民将来の子孫成りと言えば助ける。また茅で作った輪を腰に付けよ。そうすれば疫神の祟りは必ず免れる」と言った。牛頭天王が去った後、村には死の病が流行り、弟の巨丹将来の一族は全部死に絶えてしまったが蘇民将来の一族は助かったという。後に蘇民の末裔が疫病除けの社を森の中に居え奉ったことから、その社は「居森社」といわれた。

居森社の祭神・牛頭天王は仏教の守護神で、インド須弥山の山麓に豊饒国の太子として生まれ、長じて王位につき牛頭天王と称えられた。蘇民将来に授けた疫病除けの茅の輪は、中国から朝鮮半島を経て我が国へ伝わった。それは「茅の輪くぐり」の疫病除けの夏越し神事として、現在もあちこちの神社で行われている。居森石祠は宮原の人達により疫病除けを祈願し祀られたものである。

＊城南公民館だより「城南」平成26年5月15日発行

居森殿石祠

111　宮下の月天子尊塔（富田町）

下富田の宮下石仏群の中に月天子尊塔がある。頂部は四角錐で角柱型の塔である。正面に「月天子尊」、右側面に「明治廿六年三月三日」、左側面に「願主　松本善平」の刻銘がある。月天子とは、インドのバラモン神話から、ヒンドゥ教を経て仏教にとり入れられた神である。漆黒の夜空に輝く最も美しい存在は月であり、その光明を神格化した神が月天子尊として信仰された。仏教では勢至菩薩の化身ともいわれている。月天子は月宮に在り、天球を東西南北の四宮に分け、七曜を定め合わせて二十八宿となる。そのうちの七曜中で月天子は月曜の座を占める。暦はおよそ一日に一宿ずつ運行する。明治以降はその太陰暦は廃され太陽暦が採用された。

『長阿含経』によれば「月天子尊は月宮殿に住み青瑠璃よりなり、諸々の天子とともに天の種々の五欲（財・色・飲食・名誉・睡眠）の功徳を以って和合受楽し歓娯悦預す。その寿五百歳なり、子孫相承して彼の宮を持す。云々」とある。多くの天女を侍らし五欲の楽を尽くし、しかもその寿命は五百歳といわれる。それらのことが子孫繁栄の象徴とされる神として次第に信仰されるようになった。明治時代後期に、松本家は跡取りがなかなか育たず難儀しており、神にもすがる思いで月天子尊塔を造立したことが窺われる。

＊城南公民館だより「城南」平成26年6月15日発行

月天子尊塔

112　井出上神社の五神塔（飯土井町）

上位に「大己貴命　少彦名命　天照皇太神　埴山姫命　倉稲魂命」、その下に「飯土井村原の里人が社の神を石碑に刻んで祀りたいと欲した。昔、高天原の天照大御神が月夜見尊に葦原中国にいる保食神の様子を見てくるよう命じた。保食神は口からさまざまな食物を吐き出していたので穢わしいと殺してしまった。その行為に天照大御神は怒り、月夜見尊を闇夜の世界へ追放した。屍体の保食神の頭から蚕、両目から稲、耳から栗、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆、また牛や馬が化生していたので天照大御神は大いに喜び穀物の種とした。伊弉諸尊と伊弉冉尊から倉稲魂命、保食神、大宜都比売神、和久産巣日神、豊宇氣毘賣神が生まれた。埴山姫命は伊弉冉尊が臨終のとき大便より化生した。

大己貴命と少彦名命は国造りに力をあわせ、巡行し民を愛しみ医薬や禁厭（まじない）を行う」。撰文と書は井上石泉で安政二年（一八五五）に建立された。天照大御神は日の神、大己貴命は国々を巡り治め、少彦名命はそれを補佐し、埴山姫命は肥沃な土を与え、倉稲魂命は稲の豊作を約束する神である。この五神を祀ることで飯土井原地区の安泰と豊作を祈願した碑である。

＊城南公民館だより「城南」平成26年7月15日発行

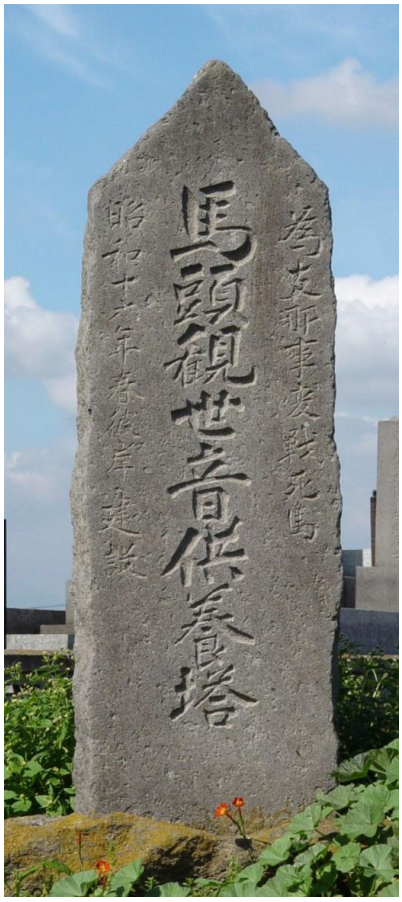
五神塔

113　地蔵堂の馬頭観世音塔（上増田町）

東組の地蔵堂境内にあり、長方形の塔で中央に「馬頭観世音供養塔」、右に「為支那事変戦死馬」左に「昭和十六年春彼岸建設」の刻銘がある。支那事変によって戦死した馬の霊を供養するため、関係者により昭和十六年に建立された塔である。支那事変とは、日本が中国へ進出していた昭和十二年（一九三七）七月七日夜、北京南郊の蘆溝橋付近で演習中の日本軍が銃撃を受けた。これを不法として翌八日早朝に日本軍が中国軍を攻撃し両軍は交戦状態になり、やがて北京・上海・南京・広東と全面戦争に至った。支那事変は現在では日中戦争と表現されている。昭和六年の満州事変とあわせ日本と中国との戦争は十五年に及んだ。なお、昭和十六年十二月八日、日本はアメリカ海軍拠点のハワイ真珠湾奇襲攻撃を行い、戦線は太平洋戦争へとさらに拡大していった。

馬頭観音信仰は七世紀頃に我が国へ渡来した。馬は勢いよく草を食み、力強く疾走する威力と観音菩薩を合体させ、魔障や悪趣から救われることを願い古代インドで信仰されていた。忿怒の形相によって様々な魔障（仏法や人々に敵する者）を砕き、悪趣（地獄・餓鬼・畜生・修羅の世界）の苦悩を断つとされている。江戸時代には馬を扱う職業や農耕の家畜を護るという性格が与えられ、本来は人を救う菩薩であったが、やがて家畜の守護として信仰されるようになった。

＊城南公民館だより「城南」平成26年8月15日発行



馬頭観世音塔

114　無量壽寺の大日如来坐像（二之宮町）

頭部に宝冠を戴き、衲衣は偏袒右肩で蓮華座に結跏趺坐し、智拳印を結ぶ金剛界大日如来像である。蓮華座の下の中台に「奉造立大毘盧遮那尊像一軀右肯趣者為光明真言講供養仍而除暗遍明來生佛果苗種也　峠享保十二丁未歳十一月日」の刻字がある。「大毘盧遮那尊像一軀を造立奉る。右の趣き肯て為すは光明真言講供養に仍って暗を除き明りを遍く生來し佛果（仏道修行で得られる成仏の結果＝悟り）の種苗也　峠に享保十二丁未歳（一七二七）十一月日」、とあり江戸時代中期に造立された。

大毘盧遮那尊とは大日如来のことであり、真言密教を代表する仏である。大日如来は胎蔵界と金剛界にそれぞれ姿を変えて現れ、胎蔵界では法界定印を結び、金剛界では智拳印を結ぶ。天平十三年（七四一）聖武天皇は、仏教が国家を鎮護するという思想によって、全国に国分寺と国分尼寺を建立させ、東大寺をその総寺とし摩訶毘盧遮那如来という大仏を安置した。摩訶とは優れて偉大ということで、毘盧遮那は光輝くもの、つまり太陽を表す。太陽の日は陰をつくるが、大日如来の慈悲は陰日向なく遍く照らし、それはあらゆる衆生に及ぶということである。従って、太陽の日にたとえながら、その働きは太陽以上であることから大をつけて大日如来という。

＊城南公民館だより「城南」平成26年9月15日発行

大日如来坐像

115　慈照院の百八拾八番供養塔（二之宮町）

正面に「百八拾八番供粮塔（くようとう）」、裏面に「天明元辛丑（かのとうし）年（一七八一）十月吉祥日」と刻銘されている。建立者や講の名称などの刻字は見受けられない。百八拾八番とは、観音霊場の数を表わし、西国三十三番（近畿地方）、四国八十八番、坂東三十三番（関東）、秩父三十四番を合わせた観音霊場のことである。刻字からは実際に全霊場巡りを行ったことは記されていないので、霊場の追善供養として造立したものであろうか。

平安時代中期、第六十五代花山（かざん）天皇は右大臣藤原兼家の陰謀によりわずか一年十カ月という短期間で失脚した。その後、花山法皇（ほうおう）は仏門に帰依（きえ）し、近畿地方の三十三カ所の観音霊場巡拝を行った。観音菩薩は、その身を三十三に変化させ衆生を救済するということから、三十三観音思想と庶民が救いを求める願望とが合致し、観音霊場の巡拝が成立した。

江戸時代頃から霊場詣（れいじょうまい）りが庶民に広がり、各地にある観音霊場を願望や救いを求めて巡拝するようになった。関東には坂東三十三番、そして秩父は三十三番としたが、後に一ヵ所を加えて三十四の霊場が成立した。なお、江戸時代は国を出て気軽に旅に出ることなど安易にできる状況ではなく、出国は厳しく管理されていた。しかし、伊勢参りや観音霊場巡拝など信仰の旅は比較的安易に許可された。

＊城南公民館だより「城南」平成26年10月15日発行

百八拾八番供養塔

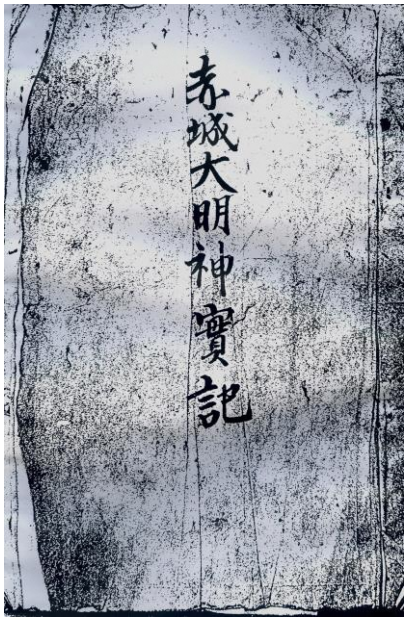
116 『神道集』の赤城大明神①

『神道集』は延文三年（一三五八）南北朝期に成立したとされている。それは諸国の神社の縁起や本地（本源である仏や菩薩）などを説話風に記したもので、室町時代以後の文芸に大きな影響を及ぼした。ここに「赤城大明神」二話のあらすじを紹介するが、物語風に記したもので史実ではない。

その一 **赤城大明神実記**「仁徳天皇の時、勢多郡深津城主の高野部右大将家成には三人の姫がいた。なお伊香保蔵人貞俊、野田三良重則、大室政勝、大胡四郎重持、脇五郎重綱、山上八郎重勝など忠勤の配下もいた。家成が都から帰ると妻は亡くなっており、信州の更科次郎の妹を後妻に迎え八王丸が誕生した。家成が都へ上がった留守に、継母は三人の姫を増田ガ淵（荒砥川）へ沈めてしまった。

家成が久々に帰郷すると三人の姫の姿が見えないので問うと「大天狗が姫たちを赤城山へさらって行った」と妻は言う。家成は赤城山へ向かい大天狗に出会ったので問うと「姫たちは奥方によって増田ガ淵へ沈められた」と。家成は間もなく病で亡くなり赤城の神となった。三人の姫たちは空より降り立ち赤城の沼で父に出会う。父は「継母の仕打ちでさぞ辛く悲しかったであろう」と、姫たちを慰めた。姫たちはその言葉を聞き感涙にむせびつつそこを去り、二ノ宮という所に居住した。帝（天皇）はこのことを知ると不憫に思い、家成に赤城正一位大明神、三人の姫は二宮三所大明神と申すべしと…云々」。

＊城南公民館だより「城南」平成26年11月15日発行



『赤城大明神実記』の表紙

117 『神道集』の赤城大明神②

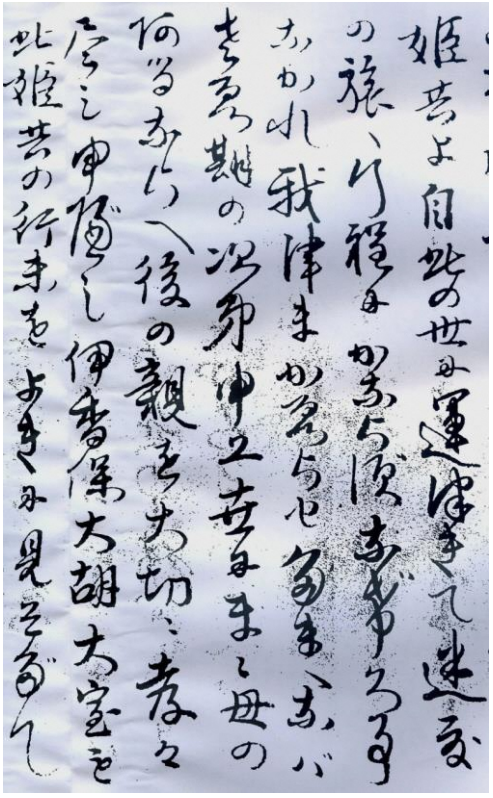
その二 赤城大明神の事

「高野辺左大将家成は深須郷（旧粕川村深津）へ左遷され、間もなく奥方は一男三姫を残して亡くなった。その後、信濃国より更科郡の地頭・更科大夫宗行の娘を後妻として迎え姫が生まれた。家成は罪を許され長男とともに都へ上った。後妻の更科女房は、自分の姫の将来を考えると先妻の三人の姫の存在が妨げになると思い、弟の更科次郎をそそのかし奸計（わるだくみ）を廻らせた。

淵名次郎へ預けていた長女の淵名姫は、淵名女房とともに簀巻きにして利根川（現荒砥川）の倍屋ガ淵（増田ガ淵）へ沈めてしまった。大室太郎へ預けられていた大室姫は危険を察知し赤城山へ逃げ込み、山中をさまよっていると龍神が現れ、赤城沼へ連れて行かれ赤城大明神となった。末の姫は伊香保大夫の万全な護りで無事であった。家成は上野国司に任ぜられ帰郷してみれば後妻の更科女房によって先妻の姫たちが過酷なことになっており、倍屋ガ淵へ行くと姫が現れ「私は継母の恨みを受けこの淵へ沈められました」といい、家成もそこへ身を投げてしまった…云々」。

南北朝時代に仏教普及のため、説教を組込み物語風に作られたのが『神道集』で、比叡山麓の天台宗系安居院で編集されたが、前述のようにこれは史実ではなく創作であり、登場人物やストーリーも自由に作られている。

＊城南公民館だより「城南」平成26年12月15日発行



『赤城大明神実記』本文の一部分

118　大塚田寮の薬師如来（上増田町）

薬師如来は寄木造りで、目は軽く閉じ、眉間には白毫を付している。頭部は螺髪で頭頂部にはわずかに肉髻が認められ、頬はふくよかである。身には衲衣をまとい法界定印を結び、その掌に薬壺を載せ蓮華座に坐している。寛保二年（一七四二）、『前橋藩領内寺院本寺并所附帳』に、上増田村には「来宝院（大塚田）」と「光明院」という二寺が記されており、江戸時代後期頃には廃寺になっているがそれらの寺院に由来する仏像であろうか。

薬師如来は、十二の大願を誓って請願を成しとげた。①衆生の姿を如来と同様に円満にする。②暗黒の世界に迷う人々に光明を与え、行くべき所を知らせる。③智慧と方便をもって人々の求めを満足させる。④本来の菩薩道を実践させる。⑤約束を守り正しく行動し、邪道を進ませない。⑥病のある人々をすべて健康にする。⑦いかなる難病に人々も救済する。⑧救われないと諦めている人を救済する。⑨あらゆる人々の迷いを断ち、正しい見解に導く。⑩無量の災いを除き苦悩を絶つ。⑪飢えているものには食物を施す。⑫衣服のないものには衣服を施す、である。如来になってからは東方瑠璃光浄土にいて、人々を救い国の病も治すという。つまり薬師如来は現世にあって利益をもたらす如来とされている。

＊城南公民館だより「城南」平成27年1月15日発行

薬師如来坐像

119　大塚田寮の日光・月光菩薩（上増田町）

木像の日光菩薩・月光菩薩は、ともに条帛に天衣をまとい蓮華座に立つ。両菩薩はともに手の先端を欠損している。本来、日光・月光菩薩は独立像としては存在せず、薬師如来を中心に左右に脇侍（仏の両脇に安置）する。いわゆる薬師三尊として存在する。日光菩薩は、薬師如来の左側（向かって右側）、月光菩薩は薬師如来の右側（向かって左側）に立つ。両菩薩ともに蓮華茎（ハスの茎）を持つが、それぞれの蓮華茎の穂先は薬師如来から離れるように持つ。日光菩薩は蓮華茎を持つが右手は下位部分を、左手は上位部分の位置を持ち、その先端には日輪を付けている。月光菩薩は日光菩薩に相反する姿で、左手は下位部分を、右手は上位部分の位置を持ち蓮華茎の先端には月輪を着けている。しかし、前述のように両菩薩の手先部分は欠落しており蓮華茎を見られない。

薬師如来が如来になる以前の梵士の時、重病の衆生を救うという大悲願を発し、仏に医王の号を与えられた。この梵士が薬師如来となり、かつて育てていた二人の子供は日照・月照といい、それが後の日光菩薩・月光菩薩になり、やがて共に薬師如来の左右に立ち脇侍になった。

＊城南公民館だより「城南」平成27年2月15日発行

日光菩薩（右）

月光菩薩（左）

120　大塚田寮の十二神将（上増田町）

十二神将は、忿怒（ふんぬ）の形相をなし岩座に立つ。体躯（たいく）は十二体とも特徴ある姿勢で、手にはそれぞれ異なる持物を持ち、さらに頭上に十二支を載せる。しかし、本像は個体別の体躯の特徴があまり見受けられず、手先や持物がすべて欠損しているので、それによる個体別を見極めるのは極めて困難である。

十二神将は、薬師如来の眷属（けんぞく）（仏や菩薩につき従う）であり、如来の周囲にあって守護する神である。薬師如来の十二の大願に順応して現れた分身ともいわれる。なお、十二神将と十二支とは元々は無関係であったが、中国古来の信仰と結びついた。平安時代中期から流行した陰陽道（おんみょうどう）などの影響を受け、平安時代末期以降の十二神将は頭部に十二支像を載せ、宮毘羅（くびら）（子）・伐折羅（ばさら）（丑）・迷企羅（めきら）（寅）・安底羅（あんちら）（卯）・頞儞羅（あにら）（辰）・珊底羅（さんちら）（巳）・因達羅（いんだら）（午）・波夷羅（はいら）（未）・摩虎羅（まこら）（申）・真達羅（しんだら）（酉）・招杜羅（しょうとら）（戌）・毘羯羅（びからら）（亥）となる。

上増田は江戸時代に廃寺になった寺院が二寺あり、大塚田寮はそれらの寺院の境外施設と考えられる。薬師如来と随侍（ずいじ）する日光、月光菩薩、さらに守護神の十二神将が保存されている。

＊城南公民館だより「城南」平成27年3月15日発行

宮毘羅（子）　伐折羅（丑）　迷企羅（寅）　安低羅（卯）

頞儞羅（辰）　珊底羅（巳）　因達羅（午）　波夷羅（未）

摩虎羅（申）　真達羅（酉）　招杜羅（戌）　毘羯羅（亥）

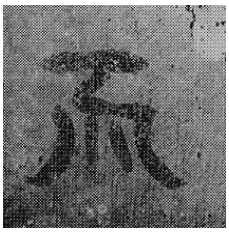
121　則天文字の土器（二之宮町）

昭和六十二年、上武道路建設に伴い宮下東遺跡の発掘調査が行われた。調査区は、二宮赤城神社の南参道に交差する東側で、古墳時代と奈良・平安時代の竪穴住居五十一軒等が検出された。また多量の出土遺物のうち文字が記された土器が一三一点検出された。器面に墨で記された墨書土器がほとんどであったが、二十二点の土師器と三点の須恵器には則天文字で「𠀋（天）」と記されていた。三点は須恵器に箆で「天」と書かれていた。土師器の墨書土器は土器焼成後に墨で筆書きするが、須恵器の箆書きは土器を焼成する前に器面に文字を刻んでいる。つまり、当初から使用目的を決めて造られているので、この集落にとって重要な意味を持っていたのであろう。

中国・唐の第三代皇帝高宗は病弱で、夫に代わって妻の則天武后が政治の実権を握っていた。皇帝の死後は自ら帝位にのぼり国号を「周」と改めた空前絶後の女帝である。その新王朝の樹立を象徴する意味をこめ、新しい文字を創製させたのが則天文字である。しかし、則天文字は則天武后の在位（六九〇～七〇四）十五年間以降は使われなくなった。本遺跡出土の則天文字の土器は八世紀後半に造られたので、文字創製から約五十年余りを経て使用されている。余談だが水戸二代藩主は、□に八方で縁起が良いと、則天文字の圀を使い光圀とした。

＊参考文献『二之宮　宮下東遺跡発掘調査報告書』（県教委・（財）県埋文事業団）。

＊城南公民館だより「城南」平成27年4月15日発行



則天文字表（上）と土器面に書かれた「天」の文字

122 稲荷藤節（上増田町）

〽ハーアーアーアー さて皆さん さて皆さんよ 又も出ましたとんまな私 出なきゃよいのに又出てがなる 揃った 揃った 踊り子も 稲の出穂（でほ）よりまだよく揃った ドッコイ ドッコイ ドッコイなっと…〽

これは稲荷藤節（いなりとうぶし）の最初の唄い出しで、久川藤太郎が作った盆踊唄である。藤太郎は、安政五年（一八五八）上増田村に生まれた。稀にみる美声の持ち主で若い頃から盆踊唄を近郷の村々で唄って大いに評判になった。その後、七七調の口説節（くどきぶし）を自らあみ出した。当時、屋敷に立派な稲荷様があったことから通称稲荷の藤さんと呼ばれ、その後この唄は「稲荷藤節」と称されるようになった。明治から大正にかけ勢多郡、前橋、伊勢崎、また利根川を運航する船頭などにひろく唄われ広まっていった。稲荷藤節はややゆったりした調子の唄で、盆踊唄と八木節との中間に位置するような音頭である。

藤太郎は荒口村の田村利忠太に稲荷藤節を伝授した。その後、利忠太は泉沢村の小沼徳三郎を一番弟子として育てた。しかし、大正六年頃からリズミカルで派手な八木節が流行（はや）ると稲荷藤節は次第に衰退していった。現在は唯一泉沢町でのみ継承され夏祭りに実演されている。稲荷藤節は、古い盆踊唄を知るうえで貴重な民俗芸能といえるもので、昭和四十九年に前橋市重要無形民俗文化財に指定された。平成七年五月には藤太郎の生家（久川光國氏宅）に稲荷藤節発祥の記念碑が建立されている。

＊城南公民館だより「城南」平成27年5月15日発行

久川藤太郎と記念碑

123　十二天社と大ケヤキ①（二之宮町）

市立二之宮小学校の東北部に十二天（じゅうにてん）という地名があり、その地にかつて十二天様が祀られていた。十二天は古代インドのバラモン教の神々であったが、後に仏教の守護神になり我が国へ伝来した。十二天とは、帝釈天（たいしゃくてん）（東）・火天（かてん）（東南）・焔摩天（えんまてん）（南）・羅刹天（らせつてん）（南西）・水天（すいてん）（西）・風天（ふうてん）（西北）・毘沙門天（びしゃもんてん）（北）・伊舎那天（いしゃなてん）（北東）・梵天（ぼんてん）（天）・地天（ちてん）（地）・日天（にってん）（日）・月天（がってん）（月）である。それは、四方・四隅・天・地・日・月の十二方位を守護する。我が国へ渡来したのは神仏習合の時代でもあり篤く信仰されてきた。

慶応四年（一八六八）、明治政府により発令された「神仏判然令（しんぶつはんぜんれい）」は仏教を排除し、神道の国教化を目指すものであった。奈良時代頃からおよそ千年続いた神仏習合を排（はい）すことになり、各地の神社境内にある仏教関連のものはすべて排除された。しかし、十二様はそのものが仏教神なので、我が国古来の神話で山の神である十二様とされ、主祭神はその親神である大山祇命（おおやまづみのみこと）を祀ることになり、社号も大山祇神社と変えることになった。その後、明治三十九年の「神社合祀令（じんじゃごうしれい）」により、各組に点在する小社と同様に、大山祇神社も十二天の地から二宮赤城神社の境内へ合祀された。

＊城南公民館だより「城南」平成27年6月15日発行

十二天を祀った十二天社であったが
大山祇神社に改称された

124　十二天社と大ケヤキ②（二之宮町）

二宮赤城神社の社殿は、数百年もの歳月を経て老朽化が進行していた。そのため昭和二十八年の神社総代会で社殿を新築することが決議された。その建設費用は字十二天（じゅうにてん）にある大山祇（おおやまづみ）神社（じんじゃ）（旧十二天様）跡境内の大ケヤキを伐採し、その売却代金を充（あ）てることとした。なお、建設費用の不足金は神社本庁の許可を得て、二宮赤城神社境内の杉を伐採しその売却代で補うこととした。その際、社務所も新築することが諮（はか）られ合意された。

十二天の大ケヤキは樹齢およそ六百年以上と推定されていた。樹高も群を抜いており、遠方からの指標となるほど際立っていた。以前、夏にはその大きな傘のような緑陰の下で行われる紙芝居に、多くの子供たちが集う憩いの場でもあった。大ケヤキの伐採は三重県の木こりに依頼し、昭和二十八年十二月に作業を始めてから終了するまで二カ月を要した。翌二十九年八月一日から社殿の解体が行われた。五日には関係者列席のもと地鎮祭が実施され、同年十月十四日に上棟式が挙行された。

＊城南公民館だより「城南」平成27年7月15日発行

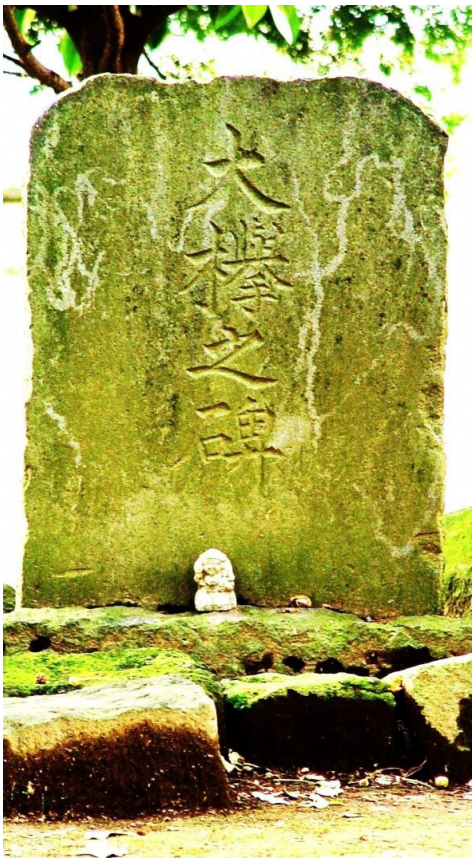
在りし日の十二天社（大山祇神社）境内の大ケヤキ

125　十二天社と大ケヤキ③（二之宮町）

二宮赤城神社の社殿竣工祝賀会は、昭和三十年四月十五日の例大祭に併せ挙行された。総工費は、二百七十万七二八十円で、十二天の大山祇神社（十二天様）跡の大ケヤキと二宮赤城神社境内の杉売却代で賄った。その内の約四三・六％は十二天の大ケヤキ売却代であった。そして社殿および社務所建設にあたり氏子への費用負担は全く無かった。

大ケヤキが伐採された後、その霊魂を鎮めるため十二天の大山祇神社跡に『大欅之碑』が建立された。撰文・揮毫は二宮赤城神社の六弥田登良麿宮司である。裏面に「此の地、本十二天大山祇神社の境内に嘗大欅有り。樹齢数百年、目通り二十五尺（約七・五㍍）に及び、洵に一大偉観。昭和二十八年十二月、之を伐採し二宮赤城神社拝殿之資とし造営に充る。茲に其の功績を讃え、往昔の雄姿を偲び、併て樹霊を祭り、石碑を建てることを欲し、其の跡を後世に残す。」、と記されている。

＊城南公民館だより「城南」平成27年8月15日発行



「大欅之碑」

此地本十二天大山祇神社之境内嘗有
大欅及樹齢数百年目通二十五尺洵一大
偉観矣昭和二十八年十二月伐採之充造
営二宮赤城神社拝殿之資茲其讃功
績偲往弱昔雄姿併而欲祭樹霊建碑石
於其跡残後世
昭和三十年二月　六弥田登良麿撰并書

「大欅之碑」裏面の碑文

126 観音廃寺の廿二夜塔（荒口町）

廿二夜の月待ち主尊・如意輪観音の丸彫り像である。足は輪王坐（右立膝で左右の足裏を合わせる）を組み、右足の立膝の上に右手の肘を載せ、頬に手をかざす思惟の姿である。如意輪観音の如意輪とは、車輪のごとく意のままに、早く駆け付けるという意味で、いかにしたら早く衆生を救えるか思案をしている姿である。左手は左膝に置き、衆生を救うことに揺るぎないことを示す按山手である。中台に「廿二夜」、「寛政二庚戌（一七九〇）年十二月吉日」、「願主 嶋村佐七母 休心 阿部善兵衛母 南鐐一片」と記されている。廿二夜の月待ち講で安産や子育てを祈願する女性により建立された。

この時代は女性名を刻むことはできず、嶋村佐七母、阿部善兵衛母と記してある。阿部善兵衛周茂は、学問を好み特に漢学に通じ近隣の子弟に教えていた。また、ある時荒砥川が氾濫した際は、率先して堤防を修築した。その功績により領主の稲葉丹後守（山城国淀城主）より名字・帯刀を許され、二人扶ちを賜わった。善兵衛の母は、廿二夜塔の造立にあたり南鐐一片を添えている。南鐐とは二朱銀（一両の八分の一）のことである。善兵衛周茂の孫は江戸幕府の「昌平黌」で学び、後に郷里へ私塾「耕讀堂」を開いた漢学者・阿部耕雲である。

＊城南公民館だより「城南」平成27年9月15日発行

廿二夜塔

127　奥原の摩利支天尊（下増田町）

奥原の荒砥川右岸の道路脇に摩利支天尊の祠がある。昔、奥原に疫病が流行りそれを鎮めるため、佐波郡芝根村川合（現玉村町芝根川合）の摩利支天尊を分祀し、明治十九年に勧請したという。祭日は七月二十五日と十一月二十八日で、昭和四十年に祠が再建された。祭日には祠の前で子供の健康と成長を願い、子供奉納相撲が行われていた。近年、次第に子供が少なくなり子供奉納相撲大会は現在行われなくなってしまった。しかし、祭日には往時の奉納相撲大会の名残りとして、現在も毎年土俵は造られている。平成十二年十一月二十八日に摩利支天尊の勧請百拾周年を記念し石碑が建立されている。

インドで信仰されていた摩利支天は天界に住む神で、後に仏教の守護神となり我が国へ伝わった。光線や陽焔（かげろう）を意味する神で、他から身を護る術を持ち、財物を損なう事なく、一切の災厄から護られ、利益を増進するという。摩利支天尊は光線であるため誰からも見えず・知られず・損なうことなく、一切の災厄から護られるということで多くの人に信仰された。特に、戦国時代の武士の守り本尊として圧倒的な信仰を受けた。武田信玄の軍師山本勘助も熱心な信者であった。

＊城南公民館だより「城南」平成27年10月15日発行

摩利支天尊と奉納相撲の土俵

128　北宿の筆功橋①（西大室町）

大室城跡の二ノ丸西端に石造の太鼓橋が保存されている。『前橋風土記』に「筆巧橋―大室村湯沢の流水に在り」、注釈に「西大室北宿にある太鼓橋、びっこ橋がこれと思われる」とある。大室村湯沢の流水とは、赤城山の湯沢付近を水源とする荒砥川から分流された東神沢川のことである。『前橋風土記』は、貞享元年九月、前橋城主・酒井氏五代、忠明（後に忠挙と改める）が、儒臣の古市剛に命じ編纂させた地誌である。それによれば太鼓橋は筆巧橋と言い、貞享元年（一六八四）以前、既に石造の太鼓橋が架橋されていたことが分かる。

酒井氏は本多・榊原・井伊氏と共に徳川四天王といわれ、三河時代からの松平家（後に徳川を名乗る）譜代の家臣である。忠明の父は大老酒井雅楽頭忠清で、当時は飛ぶ鳥落とすほどの権勢を誇っており、江戸城の下馬札前に邸宅を構えていたことから下馬将軍と異名されていた。

四代将軍が急逝し後任の将軍選考で、忠清は有栖川宮幸仁親王を推した。一方、館林城主・徳川綱吉を推挙する水戸光圀や堀田正俊と対立し、これに敗れ大老職を解任された。そのため忠清の子忠明（後の忠挙）は幕府の要職に就くことがなく前橋での生活が多かった。忠明は武士の礼節・質素倹約などの綱紀粛正を行い、城内に好古堂・大胡に求知堂という藩校を開き、城下町を整備し、市場を開かせ繁栄に努め、領民に名君と慕われた領主であった。

＊城南公民館だより「城南」平成27年11月15日発行

北宿の東神沢川に架けられていた筆功橋

129　北宿の筆功橋②（西大室町）

筆巧橋が架かっていた脇に「念佛講橋供養塔」がある。宝暦十年（一七六〇）十一月に建立されたもので、信州高遠の石工・春日甚助によるものである。赤城山に降った豪雨は激流となり下流域を襲い、木橋などはあっという間に押し流されてしまう。石橋を架けることは永年の願望であり、筆巧橋はその住民の悲願によって架橋された。その橋が流されることのないよう、念佛講の人達によって建立されたのが「念佛講橋供養塔」である。

信州高遠藩の家臣が起こした不祥事により、藩主の鳥居忠則は幕府により改易（所領・家禄・屋敷を没収）された。また後の検地により幕府に無届けで新田開発が行われていたことも発覚し、新田開発した六千三百石分の領地は幕府に召し上げられた。元禄四年（一六九一）、減領された三万三千石の高遠藩に入封したのは、河内富田林藩主の内藤清枚であった。高遠藩は逼迫した財政を立て直すため農家の二、三男を石工に養成し、その稼ぎの中から運上金を取り立て藩財政に充てる策を講じた。他国へ出稼ぎする場合は、地元と出稼ぎ先に身元引受人を定め届出させ、その管理には各郷に「石切目付」を置いて運上金の取り立てを行った。高遠の石工による巧みな石造物は上州の地に多く残されている。因みに城南地区には十五基確認されている。

＊城南公民館だより「城南」平成27年12月15日発行

念仏講の橋供養塔

130　稲荷神社の大国主大神塔（小屋原町）

境内に大国主神塔は四基あり、いずれも元治元甲子年（一八六四）建立の刻銘がある。明治政府は全国各地各所に点在する石仏・石神塔などを、それぞれ寺院や神社へ遷すよう通達した。小屋原村内でも明治十年（一八七七）ころ各所の大国主神塔は稲荷神社境内へ遷された。しかし、この塔は出雲の大国主神信仰により建立されたものではない。

大国主神は出雲神話に登場する須佐之男命から六代目の子孫とされている神である。一方、我が国へ渡来した大黒天という神は「偉大な黒い者」と称されるインドのバラモン教の神であったが、その後インドのヒンドゥー教シバ神の眷属（仏・菩薩につき従う）となり仏教に取り入れられ、武闘神と共に寺院の守護神となり豊穣を司る神になった。

日本神話の大国主神は、渡来した大黒天と混合され同一神化され信仰されるようになった。陰陽道で十干の甲と十二支の子はともに首（第一番）で、その甲子の組合せがこの信仰の最良の年とされた。「大国主神」と刻銘されていても甲子年の建立であれば本来の日本神話に登場する出雲の神ではなく、渡来した仏教神の大黒天のことである。後に大黒天は俵に座り打出の小槌を持って豊穣福神とされ、七福神の一神に採りいれられ台所の神になった。

＊城南公民館だより「城南」平成28年1月15日発行

大国主大神塔

131　今宮八幡宮の八海山神社塔（下増田町）

今宮八幡宮の境内最北西部に「八海山神社」と刻銘された石塔がある。しかし、建立年や建立者などは全く刻まれていない。八海山は新潟県の南魚沼郡大和町と六日町との境に位置する、標高一七七五㍍の山岳である。中ノ岳および駒岳と共に越後三山または魚沼三山と呼称されている。八海山の山頂は八つの峰が屹立していることからその名称があり、その内の最も急峻な大日岳山頂に八海大明神が祀られた。寛政六年（一七九四）には、普寛行者により提頭羅神王の霊場として開かれ山岳行者の聖地として信仰されるようになった。

江戸時代末期になると山岳行者以外に一般の人達にも信仰が広まり、講を組んで盛んに登拝するようになった。八海大明神は眼病平癒に御利益があると伝わっている。明治維新後は、政府により「神仏分離令」が発布されると、八海山の祭神・提頭羅神王は仏教系の神なので日本神道の国狭槌命に変えられた。およそ千百年余にわたり神仏習合の信仰が日本列島で行われていた。しかし、明治政府は神道を国家宗教とするため「神仏分離令」を発するに至り、全国の神社から仏教系の存在を排除した。そして、仏教系の社号や祭神は神道系に変えさせられた。今宮八幡宮境内のこの塔は「八海山神社」と神道系な社号で刻まれていることから、明治政府の「神仏分離令」以降に建立されたことを示している。

＊城南公民館だより「城南」平成28年2月15日発行

八海山神社塔

132　今大道の毘沙門天塔（荒口町）

毘沙門天は岩座の上に立ち、鎧をまとう浮き彫りの石像である。右手に宝塔、左手には三叉戟（三叉の矛）を持っている。右側面に「天保三 壬辰（一八三二）年」、左側面に「十一月吉日」と刻銘されている。なお、基礎の正面に「當村講中」、右側面に「西 前橋　北 大胡　東 さんたい　南 五料」と刻字され、道しるべの役割も果たしていた。この道が古くから存在し、また荒口集落の北方守護が託されて祀られていたことを物語っている。

毘沙門天は仏教の四天王であり、また十二天のうちの一神で別名多聞天とも呼ばれている。インドのヒンドゥー教では財宝を守り、北方世界を守護する神といわれる。我が国で信仰されている七福神の一神でもあり、また武士の間で軍神としても信仰された。戦国時代の武将上杉謙信は毘沙門天を篤く信仰しており、旗指物の「毘」はそれを表している。なお、守護神として北方に配されている。因みに七福神のうち我が国出身の神は①恵比寿（商売繁盛・日本）のみである。他の六神は、②大黒天（厨房神・インド）、③毘沙門天（北方守護神・インド）、④弁才天（音楽神＝財福神＝河神・インド）、⑤福禄寿（福寿神・中国）、⑥寿老人（長寿・中国）、⑦布袋（福徳神・中国）である。

＊城南公民館だより「城南」平成28年3月15日発行

荒口の北方を護る毘沙門天

133　今井神社古墳①（今井町）

今井神社古墳は、荒砥川左岸の標高約八十五㍍地点の関東ローム層台地上に立地する。全長七十一㍍、後円部の直径四十四㍍、高さ七・五㍍、前方部の幅五〇㍍、高さ七㍍の規模を持つ。竪穴式の埋葬施設を持つ前方後円墳である。盾形（たてがた）の周堀がめぐり、周堤（しゅうてい）や葺石（ふきいし）も認められており、墳丘には円筒埴輪を廻らした古墳であることが確認されており、五世紀後半の築造と考察されている。

明治二十一年（一八八八）の村誌に「明治十三年（一八八〇）に、高さ二尺（約三十㌢）ほどの宮殿の土器（家形埴輪）、人形（人物埴輪）、土器数品が出た」とある。その後、大正十四年（一九二五）に西北隅から石棺（せっかん）が見つかり直刀一振りも発見された。昭和十年（一九三五）の古墳分布調査『上毛古墳綜覧』によれば、周囲には二十五基の古墳があり今井神社古墳はその中心的な存在であるが、被葬者やその居住地は確認されていない。

＊城南公民館だより「城南」平成28年4月15日発行

前方後円墳の後円部（左）に今井神社、前方部（右）に北向き観音堂

134　今井神社古墳②（今井町）

昭和五十五年（一九八〇）、古墳の周溝部分を前橋市教委が調査をしている。今井神社古墳は竪穴式の埋葬施設を備えていることが判明している。そして五世紀後半に築造されており城南地区において最も古い前方後円墳であること確認されている。なお、昭和五十六年に市指定史跡として指定されている。以前は今井神社古墳の周辺には二十五基の古墳が存在していたが、五十六年の圃場整備事業に伴う発掘調査によると残存していたのはわずか三基のみであった。

竪穴式の埋葬主体部は凝灰岩製の組合式石棺で、蓋石には縄掛け突起が造り出されている。現在は風化が進み見え難い状態であるが、石棺の内部には赤色顔料が塗られていたことが確認されている。赤い色は遺体に取り付くという悪霊から護るためと考えられており全国的に類例が見られる。古代において赤の持つ視覚的な威力は悪霊を寄せ付けない威力があると考えられていた。石棺は神社の境内に保存されている。副葬品として鉄剣一、鉄刀三振りの出土が伝えられている。なお、現在古墳の前方部には北向き観音、後円部には今井神社が祀られている。

＊城南公民館だより「城南」平成28年5月15日発行

神社参道の左脇に保存されている組合式石棺
下段は短辺側石二枚　二段と三段は長辺側石
上段は蓋石

135 宮原の諏訪社（上増田町）

諏訪社は宮原の諏訪山古墳上に祀られ、境内に文政七年（一八二四）奉納の御神燈があることから、諏訪社の創建はそれ以前に遡ることが考えられる。明治三十九年の「神社合祀令」により村社近戸神社に合祀されたが、宮原地区に悪しきことがあり太平洋戦争後、再びこの地に戻し祀られた。諏訪社の本源は信濃国（長野県）諏訪大社で、その上社に武神として信仰されている建御名方命と后の八坂刀売命の二神が祭神として祀られている。

高天原の天照大御神は「元来、高天原と豊葦原瑞穂国（日本）は我が支配する国である」と使者を送り、国譲るよう迫ったがその都度断られ再三失敗した。その後、使者に立ったのは豪力無双の建御雷之男神である。出雲の国津神・大国主命は「自分は国を譲ることに承知するが、二人の息子の意志に委ねる」と言った。長男は国譲りに承知したが、力自慢の二男・建御名方命は「不承知」と返答し、力比べで決することを告げた。いざ戦ってみたら建御雷之男神は想像を絶する神通力と剛力で、建御名方命は恐怖のあまり東方へ逃げに逃げ信濃国まで来たが追いつかれた。そこで、「この国は天津神に譲り、吾は今後この地に留まる」と服従を誓った。この地に留まった建御名方命は諏訪大社の祭神に祀られている。

＊城南公民館だより「城南」平成28年6月15日発行

諏訪社の社殿

136　新井橋袂の庚申塔（新井町）

神沢川に架かる新井橋袂に庚申塔がある。角状の塔身には首部が造りだされ、その上に唐破風状の屋蓋が載る。塔身の上位右に「𑖀」（胎蔵界大日如来）」、左に「𑖁」（金剛界大日如来）」の梵字が刻まれている。中央に「奉造立庚申供養」、右に「貞享四丁卯年施主」、左に「三月十八日敬白」との刻銘が認められる。なお、□内の文字は土中に埋まっている。貞享四年（一六八七）の造立で、江戸時代前期の古い特徴を有している。庚申信仰は中国の道教に由来し、日本へは平安時代に伝わり、江戸時代になると庶民に盛行するようになった。

庚申は、十干の庚と十二支の申の日に講を組んで行う。人間の体内には三尸という虫がいて、庚申の日の夜に体内から抜け出し、その人が過去に犯した罪や過ちを帝釈天に上告する。その罪過の重さによって死期が早められるという。つまり、庚申の日は身を慎み、講の人達と御馳走を食べながら朝まで眠ることなく、一番鶏の鳴き声を聞いて終わるのが「庚申講」である。

なお、体内の三尸を退治するには庚申講を七回続ければ三尸は絶えるとされている。

この庚申塔の右側に地輪と火輪を欠く五輪塔が、なお左側に下半部を欠損する地蔵菩薩がある。

＊城南公民館だより「城南」平成28年7月15日発行

左は地蔵菩薩
中央は庚申塔
右は五輪塔の空輪・風輪・水輪

137　泉蔵寺の魚籃観音（小屋原町）

台形の自然石に魚籃観音が浮彫りされている。面立ちは丸くふくよかで眼は軽く閉じている。髪は長く垂らし条帛を通肩し、胸下で両手を重ね合わせた姿である。魚籃観音は大きな魚の上に坐している。魚籃観音が載る魚は頭を上に向け、尾は勢いよく跳ねあげているかのように見られる。

魚籃観音は三十三観音の一つに数えられている。中国・唐の時代に魚を商っていた美女がおり、多くの男達は競って娶ろうとしたが、結婚の条件として『普門品（観音経）』を誦する（経文を見ることなく暗唱できる）人でなければ嫁がないと言った。さらに『金剛経』と今度はもう一つ『法華経』も加えたため候補者はほとんど居なくなった。しかし、たった一人の候補者が現れた。それは馬子をしている青年であった。美女はその青年に礼を尽くして婚儀をした。二人は楽しい結婚生活を送っていたが間もなく妻は突然息絶えて死んでしまった。数日を経て婿である馬子の所へある僧が訪れた。二人で蔵を開けてみると、そこには黄金の骨が輝いていたという。実はその美女は観音菩薩の化身であった、という故事から生まれたとされている説話である。魚籃観音は、羅刹（悪鬼）や毒龍（祟りをなす怪物）の害を除くといわれている。

＊城南公民館だより「城南」平成28年8月15日発行

大きな魚に乗る浮彫りの魚籃観音

138　北原沼碑①（荒口町）

北原沼の水源は、荒砥川からの分流で荒口北部の狭い谷を堰き止めて造られたのが北原沼である。石碑の篆額に水の守護神「弁財天」が刻まれ、この沼が荒口村の重要な水源であることが窺える。石碑には次のように記されている。

「荒口村は、淀侯（山城国稲葉丹後守）の封内で、北に野が開けている。沼は埋没土で貯水量が減り田圃の水が不足した。村長阿部福明は沼底をさらうことを村人と協議し領主に訴えた。領主はこれを許し嘉永元年（一八四八）より工事を始め、五年（一八五二）に完了した。これに際し領主より百五十両（約一千五百万円）を賜ったので工事費に充てる。村中こぞって竣工を祝い祈祷する。これによって淀侯封内（荒口村）の人民は豊かで鳥獣も育つ。この堰のお蔭で実に千万年もの大きな宝物を得た。その功を碑に刻み、願わくは神のお蔭により豊年多からんことを」と刻まれている。

撰文・揮毫は岡永松陽（久留米藩主に講義する侍講）で、阿部耕雲（福明の子）の最初の師である。松陽は侍講を辞し、各地を旅し度々耕雲の家へ逗留する食客となり、最期は耕雲の家人に手厚く看取られた。松陽ゆかりの碑は荒口町に二基、荒子町に一基存在している。

＊城南公民館だより「城南」平成28年8月15日発行

北原沼碑

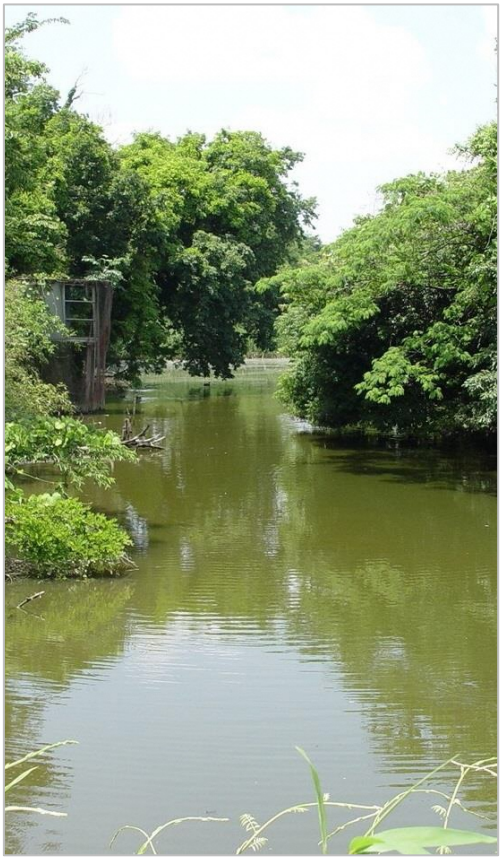
139　北原沼碑②（荒口町）

北原沼は、荒口村北部にあり二之宮村の女堀沼にも分水し貯留水を供給していた。女堀は中世の長大な用水堀で、全線が掘削されたが通水されることなく未完に終わった。近世には、二之宮の女堀の一部は水田の灌漑用水の貯留沼として使用されていた。

大正十三年、県下は未曾有（みぞう）の旱魃（かんばつ）になり荒口と二之宮は北原沼の分水問題で険悪な状況に陥ってしまった。当時の荒砥村鹿沼登喜太村長はこの争議に傍観できない状況になり、飯嶋恒次県議、勢多郡長、大胡警察署長、村議、郷社二宮赤城神社細野福三郎宮司、無量壽寺花園宥純住職、荒口と二之宮の区長等も加わり問題を解決するべく尽力した。大正十五年、信義と友情を主眼に協議を尽くしようやく両村の難問は解決し、契約証は荒砥村役場、大胡警察署、勢多郡々農会に保存された。

かつて、二之宮から荒口へ嫁いだ親戚関係は、北原沼の分水の関係で情報が漏れないよう警戒する異常な状況であったという。昭和十七年にも旱魃になり、中澤直次県議は粉骨砕身し、中断していた大正用水の工事を着工し一部に通水させた。大正用水の通水による恩恵で両村の北原沼の分水は円満な関係が維持できた。

＊城南公民館だより「城南」平成28年10月15日発行



北原沼から供給されていた
二之宮地内の女堀沼

140　井出上神社の輹祖神塔（飯土井町）

塔の中央部に「輹祖神」、裏面に「寛政六甲寅（一七九四）仲冬（十一月）吉日」の刻銘がある。「輹」は「輹」、「祖」は「祖」で共に異体字である。「神」は「神」の旧字体で刻銘されている。以前は飯土井の原地区にあったが、明治十年（一八七七）ころ明治政府の通達により、町村内に点在する仏教や神道に関わる石造物はそれぞれ寺院や神社の境内へ遷された。「輹」という文字は、車軸の中央にあって輿（屋形の内に人を乗せる箱型のもの）と車軸をつなぐものを表現する。このことから運送に携わる人たちによって、事故なく安全に過ごすことができるように願って建立されたのであろう。

輹祖神は道祖神から転じて信仰されたことが考えられる。妻に逢うため黄泉国を訪れた伊邪那岐命は、恐ろしく変貌した妻の姿に驚異し逃げ帰ろうとした。その時、道を塞ぐ幽鬼から守ったのが道反大神で、道の分岐点で村に邪鬼などが入ることを防ぐ岐神と結合し塞神となった。それが後に道祖神となり、村や家に疫病や悪霊が入ってくるのを塞ぎ、道路を守り、旅人の安全を守る神になった。「輹祖神」を刻んだものは城南地区内で唯一である。

＊城南公民館だより「城南」平成28年11月15日発行

輹祖神塔

141　蓮華院の二十二夜塔（下増田町）

如意輪観音は山門内に安置されている。蓮華座に左右の足裏を合わせる輪王坐を組んで右膝を立て、その上に右肘を置き、掌を右頬にかざす思惟手をなしている。いかにしたら早く衆生を救うことができるか、と思案する姿である。左手は、膝の上に置く按山手で、衆生を救うことに揺るぎない意志の固いことを表している。この像は一面（顔）二臂（二つの腕）の如意輪観音の丸彫り像である。頭部に戴く宝冠には阿弥陀如来の化仏を付している。如意輪とは、車輪のごとく早く衆生のため駆け付ける、という意味である。

如意輪観音は一般的に月待の十九夜・二十一夜・二十二夜待の主尊として祀られるが、二十二夜待ち講の信仰が圧倒的に多く、六臂（六つの腕）を持つ像もある。六つの腕を持つのは、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）で苦しむ衆生を救うためといわれる。「文政十丁亥（一八二七）年七月吉日」、「奥原女人講」、「信州伊那郡殿村住　倉田政右エ門」と石工の刻銘がある。奥原の女性が講を組み、安産や子育てなどのため祈願し造立したものである。

＊城南公民館だより「城南」平成28年12月15日発行

二十二夜塔の如意輪観音

142　薬師堂の馬頭観世音塔（荒子町）

「馬頭観世音」と篆書体で刻銘されている。右側に」天保九戊戌稔（一八三八）八月良辰」、裏面右下に「飯嶋善右衛門光直　飯嶋貞七俊次之建」と刻銘されている。平成元年、圃場整備事業により事前に県教委が発掘調査し薬師堂を取り囲む堀跡が発見された。その調査の結果、薬師堂は室町時代頃にはすでに創建された寺院であることが検証された。

馬頭観音信仰は七世紀頃に我が国へ渡来した。馬は勢いよく草を食み、力強く疾走する威力と観音菩薩を合体させ、魔障や悪趣（現世で悪事をした結果、行かねばならない苦しみの世界）から救われることを願い古代インドで信仰された。江戸時代には運送業や農耕の家畜を護るという性格が与えられ、本来は人を救う菩薩であったが、家畜の守護として信仰されるようになった。石山観音（観音山北野院万徳寺）は馬頭観世音を祀る寺院として著名である。農耕に馬を使っていた時代、一月十八日の祭礼には近郷近在から大勢の人達が馬を引き連れ参詣し賑わった。国内最大級の直径一九二・五チセンの鰐口（天明七年鋳造＝一七八七）を鳴らし、その下に馬を通すことで無病息災を祈願した。

＊城南公民館だより「城南」平成29年1月15日発行

篆書体で刻まれた馬頭観世音

143　旧アメリカンボード宣教師館①（小屋原町）

アメリカンボード宣教師館は、明治二十五年（一八九二）キリスト教の伝道団体アメリカンボードの宣教師住宅として建築された。外壁は横板張りで窓は上下に長く、バルコニーを備え、建物の切妻側に玄関を造作するなどの特徴が見られる。県内で唯一現存する明治時代の洋風住宅建造物として、昭和五十三年に県指定重要文化財に指定された。その後、共愛学園の小屋原町への移転に伴い、旧宣教師館も平成十二年に移転された。

共愛学園は、明治十九年（一八八六）に「前橋英学校」、翌年に「前橋英和女学校」と改称され前橋南曲輪町に創立された。その理念は、キリスト教精神に基づき自他を愛し、他に奉仕することのできる人間の育成を目指すものであった。明治二十二年（一八八九）に校名を「上毛共愛女学校」と改め前橋岩神村へ移転した。その後、平成十年に中学校と高等学校を小屋原町の新たなキャンパスへ移転し、翌年には「前橋国際大学」を開校した。なお、昨年四月には小学校が開校された。それにより保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学まで県内初の総合学園が誕生した。

＊城南公民館だより「城南」平成29年2月15日発行

玄関やバルコニーを切妻側に備えるなどの特徴を持つ宣教師館

144　旧アメリカンボード宣教師館②（小屋原町）

上毛共愛女学校へ宣教師が来日したのは明治二十一年（一八八八）である。宣教師館は宣教師専用住宅として二十五年に完成した。そして宣教師館には、ミス・シェッド、ミス・パーミリー、ミス・グリスウォルド、ミス・キース、ミス・ケーン宣教師が順次来日し、昭和十六年（一九四一）に太平洋戦争が勃発するおよそ五十年余りまで居住した。

十六世紀後半、英国のキリスト国教会の中には、従来のカトリック的な要素にあきたらない信徒がいた。それは謹厳（きんげん）で潔癖（けっぺき）や道徳的生活の清純を求め信仰をする人達である。それらの信徒が起こした行動がピューリタン改革運動である。そのピューリタン（清教徒（せいきょうと））たちはやがて国教徒のカトリックから迫害を受けるようになり、それから逃れるため一六〇二年に北アメリカに入植するようになった。そして、マサチューセッツ州、コネチカット州、ニューヨーク州などに伝道会社を設立した。その後、信仰と生活の清純を求める信念に基づき世界へ広く伝道を志すため、一八一〇年六月に新たにアメリカンボードを設立した。

＊城南公民館だより「城南」平成29年3月15日発行

旧宣教師館は二階建て、外壁は横板張り、両開き縦長窓などが西洋建築の特徴を良く表している。